

芥川龍之介と魯迅の比較研究

―「羅生門」、「鼻」と「阿Q正伝」を

中心に―

目次

序章

- 第一節 日本の社会背景
- 第二節 中国の社会背景

第一章 芥川と魯迅における文学との出会いとその特徴

- 第一節 家庭環境と創作動機
- 第一項 芥川の失恋経歴
- 第二項 魯迅の志望転換
- 第二節 夏目漱石との関わり
- 第三節 経歴から文学作品への影響
- 第四節 魯迅の翻訳姿勢

第二章 「羅生門」と「阿Q正伝」の比較研究

- 第一節 下人と阿Qの社会的地位
- 第二節 世間の規則
- 第三節 下人と阿Qの性格
- 第四節 下人の「面炮」と阿Qの「癩疮疤」
- 第五節 下人と阿Qの二回の心理変化
- 第六節 下人と阿Qのエゴイズム
- 第七節 下人の自己覚醒と阿Qの革命
- 第八節 下人の未来と阿Qの死亡

第三章 「鼻」と「阿Q正伝」の比較研究

- 第一節 禅智内供の「鼻」と阿Qの「癩疮疤」
- 第二節 傍観者の利己主義
- 第三節 禅智内供の自己欺瞞と阿Qの精神的勝利法

終章 芥川龍之介と魯迅の作風の共通点と相違点

注
参考文献目録

一	一
二	二
三	三
四	四
六	六
八	八
九	九
一七	一七
一七	一七
一八	一八
一九	一九
二四	二四
二六	二六
二八	二八
三三	三三
三六	三六
四一	四一
四二	四二
四五	四五
四八	四八
五三	五三
五六	五六

序章

中日両国は東アジアにある一衣帯水の隣国として、昔からそれぞれの歴史、地理、文化を持っていて同時に互いに影響を受けながら、自国の文学を発展させてきた。このような時代背景の下、中日両国で二人の作家が登場した。

芥川龍之介は新思潮派の代表的な作家であり、日本近代の代表的な作家として、短い生涯の中で数多くの短編小説を書いた。彼の作品は日本にだけでなく、中国文学にも大きな影響を与えた。

魯迅は中国現代文学の先駆者、小説家、翻訳者、思想家である。彼の作品は多くないが、重大な意味を持っている。彼の作品は中国だけでなく、東アジアでも広く愛読されている。「故郷」という作品は、日本でも中学校用の多くの国語教科書に収録され、「藤野先生」は高等学校の教科書に収録されている。他には、一部教科書に出る作品がある（「孔乙己」など）。また、魯迅が翻訳した「羅生門」と「鼻」も芥川本人によって評価された。

ほぼ同じ時代に生まれた二人は時代背景、家庭環境、人生経歴が似ているところが多い。また、魯迅は芥川龍之介の作品を愛読し、日本から帰国した後、芥川の「羅生門」と「鼻」を翻訳し、中国に紹介した。翻訳した作品は「中々正確に訳してある」（注1）と芥川によっても評価された。『芥川龍之介とその時代』で関口安義氏は以下のように述べた。

芥川龍之介と魯迅というテーマはしばむものではない。第一にこの時期、魯迅は芥川の『羅生門』と『鼻』を翻訳していること、第二に以降も魯迅は芥川作品に関心を示していること、第三に二人の作品世界にかなりの共通項が見られることなどが、そのことを保証する。（注2）

芥川は中国旅行の翌年に、「將軍」、「桃太郎」を発表した。若い世代の作家が芥川に批判的ないし誹謗に近いコメントも出した。これに対し、魯迅は芥川を擁護し、増田渉氏は「魯迅と芥川とでは、どこか素質的にある部分、共通する部分があるように思われないこともない」（注3）と指摘している。

今までの魯迅と芥川の比較研究では、魯迅の「故事新編」と芥川の歴史小説の比較研究が多く、「小さな出来事」と「蜜柑」の比較研究なども存在する。これらの比較研究を通し、魯迅が芥川の影響を受けたという見通しを持っている。

以上「羅生門」、「鼻」と「阿Q正伝」はそれぞれの前期の代表的な作品として重要な位置を占め、芥川の評価により、魯迅は確かに両作品をきちんと理解し、三作品の内容から見れば類似するところが多い点から、芥川龍之介と魯迅の作品を比較する時に、類似点を見逃してはならない。

第一節 日本の社会背景

大正時代に第一次世界大戦だけでなく、日本国内では関東大震災が起こった。第一次世界

大戦で、日本は戦勝国の一員として、経済は空前の好景気となった。経済が大きく発展し、一気に近代化が進んだ。しかし、一九一八年に戦争が終結し、景気が悪化した。また、関東大震災により、経済も大きな打撃を受け、日本は長い間不況に見舞われた。

第二節 中国の社会背景

長期間の「鎖国」により、中国は諸外国から先進文化や科学技術を吸収できない状況となり、だんだん世界から落後していた。その後、第一次阿片戦争や第二次阿片戦争など起こり、中国は封建社会から半植民地半封建社会に変化した。日清戦争で敗北した清朝は、その後も戊戌の変法、列強の中国分割、義和団事件、ロシアの満州占領といった動揺が続いた。この状況の下で、清朝を打倒し、中華回復を強調した辛亥革命が起こった。

辛亥革命は清を打倒し、アジアで初の共和制国家を樹立し、古代より続いた君主制を廃止した。辛亥革命は「驅除韃虜、恢復中華、創立民国、平均地権」（打倒清朝、回復中華、樹立民国、地権平等）を主張したが、結局地権平等を実現できなかった。

第一章 芥川と魯迅における文学との出会いとその特徴

第一節 家庭環境と創作動機

第一項 芥川の失恋経歴

芥川龍之介（一八九二年三月一日―一九二七年七月二四年日）は、日本の小説家である。母フクの長男として生まれた。父は東京の京橋区入船町八丁目で牛乳の製造と販売業を営んでいた。芥川が生後七か月の頃、一番上の姉の死の悲しみに暮れたままの母が、突如として精神に異常をきたし、発狂した。幼い芥川は母の実家、芥川家へ預けられ、伯母であるフキによって育てられた。芥川家は旧家の士族であり、江戸時代に代々徳川家に仕えた奥坊主であり、家中が芸術、演芸を愛好し、江戸の文人的趣味が残っていた。また伯母であるフキは教育熱心な人物であったので、芥川は小さい頃から多くの本に触れた。十一歳の頃に、生母であるフクが死去した。芥川は叔父である芥川道章に養子として引き取られ、芥川姓を名乗ることになった。この頃の経験は、芥川に強い影響を与えた。

また、大正四年頃に芥川は、不幸な初恋を体験していた。吉田弥生との恋愛は養家の強い反対に遭い、特にその姿勢を崩さなかったのが伯母であった。結局失恋に終わった。この事件は芥川に苦い経験となったのはいうまでもなく、彼は今更ながら深刻に養子である自分の不自由さを思い、養父母の彼に対する愛情に、利己主義を痛感した。芥川は大正四年三月九日親友恒藤恭あての書簡にこう書いた。

イゴイズムをはなれた愛があるかどうか。イゴイズムのある愛には、人と人との間の障壁をわたる事はできない。人の上に落ちてくる生存苦の寂寞を癒す事はできない。イゴイズムのない愛がないとすれば、人の一生ほど苦しいものはない。

周囲は醜い。自分も醜い。そしてそれを目の当たりに見て生きるのは苦しい。しかも人はそのまま生きることを強ひられる。：

僕はイゴイズムをはなれた愛の存在を疑ふ。：僕はどうすればいいのかわからない。（注4）

「羅生門」の執筆の動機に関し、芥川本人の言説を踏まえると「羅生門」と「鼻」は純粋に芥川の吉田弥生への所謂失恋体験の所産だと考えられる。「あの頃の自分の事」において、芥川は以下のように述べた。

自分は半年ばかり前から悪くこだはった恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかった。そこでとりあへず先、今昔物語から材料を取って、この二つの短篇を書いた。書いたと云つても、発表したのは『羅生門』だけで、『鼻』の方はまだ途中で止まつたきり、暫くは片がつかなかった。（注5）

この「愉快な小説」について、山下真史氏は以下のように分析した。

良識ある大人には非難されるが、少年が一瞬だけでも、愉快な気分を味わえたこと間違いない。…芥川は、恋愛問題で沈んだ心をこうした滅茶苦茶な行動をする青年を書くことによって晴らしたかったのだろう。(注6)

また「鼻」の執筆の動機に関し、田村修一氏は以下のように説明した。

つまり第四次『新思潮』は、これは松岡の言葉であるが、『漱石を第一の読者にして』創刊されたのであり、そうであれば笠井秋生による、『鼻』執筆中の芥川は、読者としての漱石を強く意識しながら筆を進めていたにちがいない。(注7)

第二項 魯迅の志望転換

魯迅（二八八一年九月二十五日―一九三六年十月一九日）は、中国の小説家、翻訳家、思想家である。本名は周樹人、字は豫才である。彼は浙江省紹興府の士大夫の家系の長男である。後に一八八五年には魯迅と同じ文学者となった弟・周作人（二八八五年―一九六七年）も生まれた。もともと高級官僚の祖父によって家庭は裕福であったが、一八九三年に祖父は職務上の過失によって入獄し、父親の重病もあり、一家は急速に没落した。このため魯迅は質屋と薬屋の往復に三年間費やすことになったが、それも空しく、父は没した。「呐喊」の自序に魯迅はこう書いた。

我有四年多、曾经常常、―几乎是每天、出入于质铺和药店里，年纪可是忘却了，总之是药店的柜台正和我一样高，质铺的是比我高一倍，我从一倍高的柜台外送上衣服或首饰去，在侮蔑里接了钱，再到一样高的柜台上给我久病的父亲去买药。回家之后，又须忙别的事了，因为开方的医生是最有名的，以此所用的药引也奇特：冬天的芦根，经霜三年的甘蔗，蟋蟀要原对的，结子的平地木，…多不是容易办到的东西。然而我的父亲终于日重一日的亡故了。

有谁从小康人家而坠入困顿的么，我以为在这途径中，大概可以看见世人的真面目。我要到N进K学堂去了，仿佛是想走异路，逃异地，去寻求别样的人们。(注8)

（わたしは、四年あまり、いつもいつも―ほとんど毎日、質屋と薬屋の間を往復した。年齢は忘れたが、つまり薬屋の櫃台がわたしの脊長けと同じ高さで、質屋のそれは、ほとんど倍増しの高さであった。わたしは一倍も高い櫃台の外から著物や簪を差出し、侮蔑の中に銭を受取り、今度は脊長けと同じ櫃台の前へ行って、長わずらいの父のために薬を買った。処方を出した医者はいとも名高き先生で、所用の薬は奇妙キテレッツのものであったから、家へ帰ると、またほかのことで急がしかった。寒中の蘆の根、三年の霜

を経た甘蔗、番い離れぬ一對の蟋蟀、実を結んだ平地の木：多くはなかなか手に入れ難いもので、それでもいいが、父の病は日一日と重くなり、遂に甲斐なく死亡した。

誰でも瘦世帯の中に育った者は、全く、困り切ってしまうことはいあるまい。わたしは思う。この道筋に在る者は大概他人の真面目を見出すことが出来る。わたしはN地に行つてK学校に入るつもりだ。とにかく変つた道筋に出て、変つた方面に通れ、縁もゆかりもない人に手頼ろうと思う。(井上紅梅訳)

日本の明治維新(一八六八年)は西洋医学に端を發した革命であつたことを知り、「我的夢很美满、预备卒業回来、救治象我父亲似的被误的病人的疾苦、战争时候便去当军医、一面又促进了国人对于维新的信仰」(私の夢は美しかった―卒業して帰つたら、父のように誤診されている病人の苦しみを救い、戦争の時に軍医になろう、そして国民の維新に対する信仰を広めよう。)(筆者訳)という思いを持ち、周樹人は国費留学生として日本に留学した。この時の周樹人は医学を専攻したが、同時に西洋の文学や哲学にも心惹かれた。

しかし、周樹人は思わぬ出来事に遭遇した。入学した年に日露戦争が勃發した。当時、医学校では講義用の幻灯機で日露戦争に関する時事的幻灯画を見せていた。その幻灯写真には中国人がロシアのスパイとしてまさに打ち首にされようとしている映像が映し出されていた。そして屈辱を全く感ずることなく、好奇心に満ちた表情でその出来事をただ眺めていた。ただの一団の中国人の姿を見た周樹人は医学から文学への転向を決断した。「呐喊」の自序に次のように書いた。

这一学年没有完毕、我已经到了东京了、因为从那一回以后、我便觉得医学并非一件紧要事、凡是愚弱的国民、即使体格如何健全、如何茁壮、也只能做毫无意义的示众的材料和看客、病死多少是不必以为不幸的。所以我们的第一要著、是在改变他们的精神、而善于改变精神的、我那时以为当然要推文艺、于是想提倡文艺运动了。(注9)

(この学年が済まぬうちにわたしはもう東京へ来てしまった。あのことがあってから、医学は決して重要なものでないと悟った。およそ愚劣な国民は体格がいかに健全であつても、いかに屈強であつても、全く無意義の見世物の材料になるか、あるいはその観客になるだけのことである。病死の多少は不幸と極まりきつたものではない。だからわたしどもの第一要件は、彼等の精神を改変するにあるので、しかもいい方に改変するのだ。わたしはその時当然文芸を推した。)(井上紅梅訳)

その故、彼は一九〇六年、学校を退学し一時帰国した。同年、弟の周作人も同行し再来日した周樹人は、東京で近代西欧思想を摂取し独自の文学観を切り開いていった。そして、筆名を「魯迅」として「文学革命」し始めた。

また、「阿Q正伝」の執筆について、魯迅自身は「阿Q正传的成因」において次のように述べている。

据我的意思，中国倘不革命，阿Q便不做，既然革命，就会做的。我的阿Q的命运，也只能如此，人格也恐怕并不是两个。民国元年已经过去，无可追踪了，但此后倘再有改革，我相信还会有阿Q似的革命党出现。我也很愿意如人们所说，我只写出了现在以前的或一时期，但还恐怕我所看见的并非现代的前身，而是其后，或者竟是二三十年之后。（注10）

（ここにおいて「阿Q」が革命党になるべきか否かの問題が発生せざるを得なかった。私の考では、もし中国が革命しないならば、「阿Q」もしない。革命したとすれば、「阿Q」もする。：民国元年は既に過ぎ去って追うべくもないが、今後もしまた改革があれば「阿Q」のような革命党は必ず出現するだろうと私は信じている。人々の云うように、私は現在以前のある一時期を描いたに過ぎぬ等ということは、私もそうありたいと思う。しかし私は、私が見たものが決して現在の前身でなく、恐らくは後身であること、それも二三十年後かもしれないという危惧さえ感ずるのである。」（翻訳は竹内好訳の『鲁迅文集』第四卷 七三頁）

また、竹内好氏は、『阿Q』が中国人の代名詞であるという世評も承認する」（注11）と言った。

第二節 夏目漱石との関わり

芥川と鲁迅は相手の存在を知っていたが、実際に一度も会ったことはなかった。しかし、二人の間に共通する人がいる。それは夏目漱石である。夏目漱石は、日本の小説家、評論家、英文学者、俳人である。明治末期から大正初期にかけ、活躍した近代日本文学の頂点に立つ作家の一人である。

鲁迅と夏目漱石の関連について、周作人の言葉により、鲁迅は日本に留学中に特に夏目漱石を注目していた。晩年の鲁迅もこう書いている。

我怎么做起小说来？：在中国，小说不算文学，做小说的也决不能称为文学家，所以并没有人想在这一条道路上出世。我也并没有要将小说抬进「文苑」里的意思，不过想利用他的力量，来改良社会。

但也不是自己想创作，注重的倒是在介绍，在翻译，而尤其注重于短篇，特别是被压迫的民族中的作者的作品。

：记得当时最爱看的作者，是俄国的果戈理（N A G o g o l）和波兰的显克微支（S i e k i e w i t z）。日本的，是夏目漱石和森鸥外。（注12）

（わたしはどのようなにして、小説を書きはじめたか。：（かつて）中国においては、小説は文学のうちには入らず、小説を書く人間は文学家と呼ばれなかった。：小説を「文苑」のなかにかつぎこもうというつもりは、わたしにもなかった。その力を利用して、

社会を改良しよう、とおもっただけのことである。

だが、創作しようとおもったわけではなく、勢力を注いだのは紹介、翻訳であった。とりわけ短編、特に被压迫民族の作家の作品に精力を注いだ。

：当時、もつとも愛読した作者は、ロシアのゴーゴリ、ポーランドのシェンキエヴィッチだった。日本のものでは、夏目漱石と森鷗外であった。）（翻訳は徳永重良氏の「鲁迅とその周辺の人びと―日中関係比較の視点から―」により）

『現代日本小説集』の中で、鲁迅が翻訳したものは芥川のみならず、夏目漱石の「懸物」と「クレイグ先生」も翻訳した。鲁迅は二人について短いコメントをしていた。（抜粋）

漱石：他所主張的是所谓“低徊趣味”，又称“有余裕的文学”。夏目的著作以想像丰富，文词精美见称。《哥儿》（BOCCIAN），《我是猫》（Wagahai wa neko de aru）诸篇，轻快洒脱，富于机智，是明治文坛上的新江戸艺术的主流，当世无与匹者。（注13）

（いわゆる「低徊趣味」の文学で、また「余裕のある文学」とも称した。彼の作品は「想像力が豊かで、文辞が美しいことで知られている。猫、坊ちゃんなどの諸編は、軽妙洒脱で、機知に富み、明治文壇における新江戸芸術の主流であり、当世にならぶものがない。）（翻訳は同上）

芥川：他的作品所用的主题，最多的是希望已达之后的不安，或者正不安时的心情。他又多用旧材料，有时近于故事的翻译。但他的复述古事并不专是好奇，还有他的更深的根据。（注14）

（彼の作品：主題で最も多いものは希望が達せられた後の不安か、あるいはいままさに不安におののいているときの心情である。彼はまた古い材料を多用し、ときには物語の翻訳に近くなっている。だが、昔のことをくり返すのは単なる好奇心だけからではなく、より深い根拠に基づいていることである。）（翻訳は同上）

今まで鲁迅と夏目漱石との比較研究は多数存在する。作品比較では主として「坊っちゃん」と「阿Q正伝」、「阿Q正伝」と「我輩は猫である」の比較研究である。他には社会批判、文明批判という角度から研究する論文が多い。作品の比較から見ると、鲁迅は確かに夏目漱石の影響を受けた。また、周作人は「鲁迅的文学修养」の中で、以下のように述べた。

此外日本作家中有夏目漱石，写有一部长篇小说，名曰《我是猫》，假托猫的口气，描写社会情状，加以讽刺，在日本现代文学上很有名，鲁迅在东京的时候也很爱读。在鲁迅的小说上虽然看不出明了的痕迹，但总受到它的有些影响，这是鲁迅自己在生前也曾承认的。（注15）

（ほかに日本作家の中に夏目漱石がいる。彼が書いたある長編小説の名は「吾輩は猫

である」であり、猫の口を託し、社会の状況を書き、風刺を加え、日本現代文学でけっこう有名であり、魯迅は東京にいた時も愛読していた。魯迅の小説から明瞭な『吾輩は猫である』の痕跡が見えないにもかかわらず、そこから多少の影響を受けたことを、生前に魯迅自らも認めているのである。）（筆者訳）

また「关于魯迅」の中でも、以下のように述べた。

豫才后日所作小说虽与漱石作风不似，但其嘲讽中轻妙的笔致，实颇受漱石的影响。（注16）

（後日書いた小説は漱石の作風に似てはいないけれども、その嘲諷中の軽妙な筆致は実は漱石の影響を相当強く受けたもの。）（筆者訳）

芥川と夏目漱石の関連について、芥川は夏目漱石の下の「木曜会」の門下生の一人である。二人は師弟の関係で、芥川はいつも夏目漱石の世話を受けた。

しかし、管見によると、先行研究の中に、芥川が夏目漱石の文学の影響を受けたという資料はほとんど見えない。また、魯迅は夏目漱石と芥川の二人の影響を受けたので、直接的に夏目漱石の影響を受けたか、芥川を通じ間接的に影響を受けたか、区別しにくい。

第三節 生い立ちから文学作品への影響

中国の近代化は難しい過程を経ていた。長い歴史をもつ中国があらゆる分野で自国の圧倒的な優位性が長期間維持されてきたので、外国の固有の文化や制度を学び、導入する必要はないと思いつ込んでいた。このような考え方が、旧社会を改革し、近代化を進める上で強固な阻止要因となったことは言うまでもない。清朝末期、さまざまな改革案が提起されたが、そのうち実施されたものは少なく、結局、抜本的な改革はすべて失敗した。

辛亥革命は近代中国で比較的、完全な民族民主革命になったが、徹底的に反帝国主義・反封建主義を貫くことはできなかった。

その後、一九一五年に新文化運動が起った。この運動の中で政治ではなく、文化を主要手段として社会を革新しようと主張した。魯迅はこの運動の中心の一人として、「狂人日記」を発表した。「狂人日記」は中国の初めの現代白話小説、中国の近代文学の幕開けでもあり、重要な影響をもたらした。その後、魯迅は数多くの小説を書き、実質的に「文学革命」の成果を挙げた。

晩年、魯迅は『南腔北調集』でこう書いていた。

我怎么做起小说来？——在中国，小说不算文学，做小说的也决不能称为文学家，所以并没有人想在这一条道路上出世。我也并没有要将小说抬进「文苑」里的意思，不过想利用他的力量，来改良社会。

但也不是自己想创作，注重的倒是在介绍，在翻译，而尤其注重于短篇，特别是被压迫的民族中的作者的作品。：自然，做起小说来，总不免自己有些主观的。例如，说到「为什么」做小说罢，我仍抱着十多年前的「启蒙主义」，以为必须是「为人生」，而且要改良这人生。：所以我的取材，多采自病态社会的不幸的人们中，意思是在揭出病苦，引起疗救的注意。（注17）

（私はどのようにして、小説を書き始めたか。：（かつて）中国においては、小説は文学のうちには入らず、小説を書く人間は文学家と呼ばれなかった。：私にも小説を「文苑」の中に担ぎ込もうというつもりはなかった。その力を利用して、社会を改良しようと思っただけである。

だが、創作しようと思ったわけではなく、精力を注いだのは紹介、翻訳であった。とりわけ短編、特に被压迫民族の作家の作品に精力を注いだ。：小説を書く時に、自分の主観を持っているのは避けられない。例えば、「どうして」小説を書くのか、私は十年前ごろの「啓蒙主義」を抱き、「人生のために」と思い込み、そしてこの人生を改良しよう。：だから私は病的な社会にいる不幸な人々から取材し、目的は病苦を暴き、治療の注意を引こう。）（筆者訳）

芥川は幼いころからの不幸―母の狂死、他家への養子、失恋、生の不安などが深層心理に影響をもたらした。彼は繊細で傷つきやすく、ずっと「生存苦の寂寞」に悩んでいた。芥川と魯迅の生い立ちは類似している。ほぼ同じ時代に生まれた二人は、幼いころから文学に触れ、家庭の不幸な出来事に遭遇し、人間性の醜悪を体験した。しかし、二人の創作動機は全然違う。失恋を体験した芥川は現実から目を背け、「羅生門」を書いた。芥川は漱石を意識し、「鼻」を書いた。魯迅は愚弱な国民の姿を見て、文学で国民の精神を改造したので、文学活動を始めた。社会背景、家庭環境と創作動機から見れば、芥川は個人的に、失恋事件から自覚した人間性を自分の作品に書き込み、魯迅は公的に、国民の精神を改変するという決心を持ち、現実の社会に直面し、文学でその時代の中国社会の暗闇と病根を暴露した。

第四節 魯迅の翻訳姿勢

翻訳とは「ある言語で表された文章を他の言語に置き換えて表すこと。また、その文章。」というものである。それ故、外来の文学作品を読む時に、翻訳者の役割は非常に重要である。中国では翻訳者である嚴復が一八九八年に「信达雅」という翻訳基準を提唱した。信とは、原文に対する信義、すなわち忠実さである。達とは、達意の訳文であり、原文の言わんとするところを完全に伝達することである。雅とは、格調ある文章表現である。原文に対する信を守るだけでも非常に難しい。また、信を顧み内容の伝達が阻害されるようであれば翻訳しなかったのと同じである。格調を備えた文章表現がなければ内容が確実に伝わらない。この理論は翻訳者の普遍的な支持を得て、中国の翻訳界の主流を占めてきた。

しかし、これを達成するのは簡単ではない。訳文は翻訳者が主観的な活動の結果として、

完全に人為の要素を排除するのはあり得ない。翻訳者は翻訳中に思わず自分の見解を入れる可能性が存在する。その存在があるかどうか、強いか弱いかは、翻訳の結果、つまり訳文の価値に影響を与える。

それ故、三作品を比較する前に、魯迅の翻訳態度や魯迅が「羅生門」、「鼻」をきちんと理解しているかなどを見逃してはならない。

五四運動（一九一九年）と新文化運動（一九一五―一九二三年）が盛んな時に、白話文は文学翻訳の領域に普及された。その時代の多くの白話文運動の提唱者にとって、構文や表現が乏しい現代の白話ほどのように新時代の流れに適応でき、もつと綿密な論理と複雑な思想を表すか悩んでいた。この問題を解決するため、白話文運動の参加者は外国の言語、特にヨーロッパから形態論と構文を借用することが、白話文の表現力を向上させる重要なルートだと考えた。魯迅もこの影響を受けていた。彼は以下のように述べた。

欧化文法的侵入中国白話の大原因、并非因为好奇，乃是为了必要。：要说得精密，固有的白话不够用，便只得采些外国的句法。（注18）

（ヨーロッパ化された文法が中国の白話文に侵入された主な理由は、好奇心のためではなく、必要性のためだった。：正確に言うと、固有の白話が不十分だったら、いくつかの外国の句の構造を採用するしかない。）（筆者訳）

不但在输入新的内容，也在输入新的表现法。我还以为即便为乙类读者而译的书，也应该时常加些新的字眼，新的语法在里面，但自然不宜太多，以偶尔遇见，而想一想，或问一问就能懂得为度。必须这样，群众的言语才能够丰富起来。（注19）

（新しい内容を輸入するだけでなく、新しい表現法を輸入する。：乙類にあたる読者向けに翻訳された本でも、常に新しい単語や文法を加えるべきだが、当然多すぎなく、たまに会って考えたり聞いたりするだけで分かる程度であると思う。この方法でのみ、大衆の言語を豊かにすることができる。）（筆者訳）（原文によると、乙は「ある程度の識字能力がある人」を指す）

また、王唯斯氏は以下のように主張した。

外国の文化や思想を忠実に伝えるために、魯迅は「硬訳」（原文の一字一句も疎かにせず、忠実に訳していく）や「寧信而不順」（「すらすら読めることよりも、むしろ原文に忠実であること」）などの翻訳の姿勢。（注20）

先行研究を参考し、特に王氏の「芥川龍之介『羅生門』と『鼻』の中国語訳について」、翻訳した「羅生門」「鼻」と原文の比較を五つにまとめ、比較分析する。

第一項 語彙

「羅生門」という作品の中で「市女笠」「揉鳥帽子」「検非違使」「太刀帯の陣」というよ

うな名詞があり、「鼻」の中で「内道場供奉」「中童子」「下法師」「法慳貪の罪」「内典外典」という固有名詞がある。これらの名詞は日本の時代背景に関係づけるので、その服装、役職、地名などについて、現代の日本人であっても、必要な知識を持っていないと完全に理解できるとは限らない。中国でも完全に対応する言葉がない。これらの文化差がある名詞に対し、魯迅が日本語に翻訳する際に固有名詞をそのまま借用し、注釈を施している。このように、原文のイメージや時代性を忠実に維持している。

これ以外に、魯迅は原文の語彙を変えず、そのまま訳文に挿入することも多い。その中に、原文の外来語をそのままに保持し、その原文の特色を保持した。

「その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の *Sentimental* | *isme* に影響した。」「羅生門」

“ 況且今日の天色，很影响到这平安朝家将的 *Sentimentalism* 上去。”

翻訳する際に、中国の言葉を使わず、敢えて外国の言葉を使ったことから、魯迅は翻訳を通し、中国に新しい語彙を取り入れ、中国語を改革しようという意図が窺える。この点から見ると、魯迅は自分の作品が外国作品の影響を受ける可能性がある。

第二項 語順

中国語の語順と日本語の語順が違うので、翻訳する際に、中国人が分かりやすく理解するために、中国語の語順に変えるべきである。しかし、魯迅はその翻訳方法を採用しなかった。例えば

「成程な、死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここに
いる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。」「羅生門」

“ 自然的，拔死人的頭髮，真不知道是怎樣的惡事呵。只是，在這里的這些死人，都是，
便給這麼辦，也是活該的人們。”

王唯斯氏は分析を通じ、「魯迅訳ではなるべく原文の語順や区切りに合わせたような訳出を採用している」と述べた。

これについて、魯迅は厨川白村の「象牙の塔を出て」を翻訳する時にその後記（一九二五年十二月三日）で以下のように書いた。

文句任然是直译，和我历来所取的方法一样；也竭力想保存原书的口吻，大抵连语句的
前后次序也不甚颠倒。（注21）

（文章は今でも文字通り翻訳され、私が今まで取っている方法と同じである。また、
原文の言い方を維持するためにおそらく、文章の順序さえ逆にしなかった。）（筆者訳）

魯迅が「象牙の塔を出て」の翻訳時期は「羅生門」と「鼻」より遅かったが、その翻訳態度は変化がなかった。訳文と原文と比較すると、彼が翻訳したものは確かに「按板規逐句、甚而至于逐字译的」（注22）（「慣例により、句ごとに、さらに字ごとに翻訳することもある。」）（筆者訳）である。これについて魯迅は「我自信并无故意的曲译」（注23）（「意図的に元の意味を歪める翻訳をしなかったと確信している。」）（筆者訳）と信じていた。

訳文は原文の言葉と対応し、原文の言葉を逐一訳し、原文を忠実に伝えるべきである。しかし、このような訳文はその国の規範に合わないもので、その国の人々にとって読みづらくなる。魯迅がこの翻訳方法を採用するのは恐らく中国語を豊かにするためだろう。

第三項 文法

魯迅は原文から直接的に訳文に移入したのは語彙のみならず、日本語の文法も積極的に中国語に導入した。

例えば、次の例文は中国語にはない句の構造を引用した。

「ある日の暮方の事である。」「羅生門」
“ 是一日的傍晚的事。 ”

この句は「羅生門」の初めの文であり、作品の主旋律や雰囲気を定める働きをする。それ故、最初の句の翻訳は全編の翻訳に影響を与える。原文は日本語の典型的な主語のない文であるが、中国語の中でこのような表現方式はほとんどない。しかし、魯迅は原作の語彙と文法を守り、原文の語順も変えずに、一字一句に訳文に移入した。つまり、中国語の文法にこだわらず、積極的に原文の形式を保持した。

第四項 修辭

翻訳する際に、修辭について注意しなければならない。例えば「羅生門」の中で、以下の句は換喩という修辭を使う。

羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。

魯迅は次のように翻訳した。

这罗生門，既然在朱雀大路上，则这男子之外，总还该有两三个避雨的市女笠和揉烏帽子的。

原文の「市女笠や揉烏帽子」は換喩として人間を指し示す名詞であるが、これを中国語に翻訳すると、動詞を付け加えないと中国語の文法に合致しない。しかし、それを十分承知していたはずの魯迅は名詞として訳出している（注24）。つまり、魯迅は中国人にとっての読

みやすきを犠牲にし、外国語の用法を保持し、翻訳の忠実性を選んだ。

第四項 誤訳

魯迅は翻訳する際に、できるだけ原文の語彙を借用したが、正確ではないところもある。例えば、「羅生門」の「下人」という名詞を「家将」に翻訳するのは正確ではない。『角川日本史辞典』では「下人」についてこう説明している。

平安・鎌倉時代では荘園内の武士・荘官・名主に隷属し、家事・耕作などに使役され相続・売買の対象とされたもの。

つまり、奴隸的な存在である。つまり、下人は身分が低く、また雑役に従事した者なので、家事、農業、軍事などの仕事内容が特定できない。漢典辞書で調べると、「家将」は以下のように二つの意味がある。

(1) 谓一家的首領；家长。

(2) 旧时富豪官僚家中雇用的武装仆役。

〔1〕：一家のリーダー；親。

(2)：昔、富豪や官僚の家で雇われていた武装した使用人。〕(筆者訳)

(2)の解釈を見ると、家将も下人も使用人だが、家将の仕事内容が決められ、主人の安全を守り、力が強い武装する使用人である。地位において、家将は下人より少し高い。その故、武装した「家将」より「仆人」に翻訳するのは相応しい。

「鼻」の中でも間違ったところも存在する。

内供はこの方面でもほとんど出来るだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある。鼠の尿を鼻へなすって見た事もある。

この句について、魯迅は次のように訳した。

内供在这一方面几乎做尽了可能的事，也喝过老鸦脚爪煎出的汤，鼻子上也擦过老鼠的溺。

しかし、烏瓜は日本語である植物を指すのに、魯迅は動物の爪に翻訳した。これは恐らく「瓜」を「爪」に見間違えた結果だろう。以上の例文を見ると、魯迅が間違ったところがあるが、原作者の意図が忠実に伝わることを意識した。訳文の中で彼は数多くの借用する語彙、文法、句の構造などを使った。しかし、魯迅は全部を硬訳ではなく、意識するところもある。

例えば

「そうして、内供自身もまた、その予期通り、結局この熱心な勧告に聽従する事になった。」「鼻」

“内供自己也适如所期，终于依了那弟子和尚的热心的劝告了。”

この「聽従」をそのまま「听从」にしても、読者の理解に差し支えなく、形式から見ると原文に忠実である。しかし、魯迅はこの訳を諦め、「依」を選んだ。翻訳について、魯迅は以下のように述べた。

凡是翻译，必须兼顾着两面，一当然力求其易懂，一则保存着原作的丰姿，但这保存，却又常常和易懂相矛盾……看不惯了。不过它原是洋鬼子，当然谁也看不惯，为比较的顺眼起见，只能改换他的衣裳，却不该削低他的鼻子，剜掉他的眼睛。我是不主张削鼻剜眼的，所以有些地方，仍然宁可译得不顺口。（注25）

（翻訳というものは、両面を兼ねる必要がある、一方はもちろん分かりやすさを求め、もう一方は原作の姿を維持するが、この維持はしばしば分かりやすさと矛盾し、見慣れない。しかし、これはもともと外国のものであったので、もちろん誰にもわからない。比較の見慣れのために着替えるしかないが、鼻を削り目をえぐってはいけない。私は鼻を削り目をえぐることを推奨しない。そのため、あるところは、スムーズに翻訳しない。）

（筆者訳）

つまり、魯迅は原作の形式と内容を大切にし、正確に翻訳するために、意識を排除しない。

魯迅の訳文の中では、白話文が多用されるが、少数の文語が残存している（例えば「頤」、「汤」、「老姬」、「伊」、「乎」、「者」などがある）。これは時代背景に関連している。五四運動以前は文語が主流である時代であり、書物や訳文は主に文語であった。普通の民衆にとつて、文語は遠い存在なので、白話文だけ普及すれば、科学的な、民主的な思想を伝え、社会の進歩が実現できる。魯迅は白話文の先駆者であり、その時代の書物に書かれた白話文はまだ成熟していなかった。したがって、二十年代に白話文が発展し始めたところに、白話文に文語が残存することも当然なことである。また、魯迅が外国の作品を翻訳する時に、原文の語彙と文法を直接的に訳文に移入するだけでなく、原文の言葉と対応させ、原文の言葉を逐一訳し、コンマ、ピリオドさえ一致させるのは、魯迅は中国に新しい言葉と句の構造を輸入したい意図があるからである。比較する時に、この点を見逃すべきでない。

翻訳に対し、魯迅は以下のように書いた。

倘有潜心研究者，解散原来句法，并将木语改浅，意译为近于解释，才好；或从原文翻译，那就更好了。（注26）

（もし専門の研究者がいれば、元の句の構造を分解し、そして専門用語を分かりやすく

変更し、解釈に近い翻訳をした方がよく、或いは原文から翻訳した方がもつとよい。)
(筆者記)

自然、世間总会有较好的翻译者，能够译成既不曲，也不“硬”或“死”的文章的，那时我的译本当然就被淘汰，我就只要来填这从「无有」到「较好」的空间罢了。(注27)
(当然、世間で優れた翻訳者は常に存在し、本来の意味を歪めず、硬訳もせず翻訳すると、その時に私の翻訳は当然淘汰される。私は『何も無いこと』から『良いもの』までの空間を埋めるだけである。)(筆者記)

彼は自分の翻訳が完璧なものではなく、ただの中国語を改革する一つの過程であると述べている。以下は彼の主張である。

要医这病，我以为只好陆续吃一点苦，装进异样的句法去，古的，外省外府的，外国的，后来便可以据为己有。一面尽量输入，一面尽量消化，吸收，可用的传下去了，渣滓就听他剩落在过去里。所以在现在容忍「多少的不顺」，倒并不能算「防守」，其实也还是种的「进攻」。：其中的一部分，将从「不顺」而成为「顺」，有一部分，则因为到底「不顺」而被淘汰，被踢开。(注28)

(この病を治すために、私は少し苦しみ続け、異常な句の構造を入れるしかないと思つた。古いもの、外の省や外の地方のもの、そして外国のもの、その後それを自分のものにするができる。：一方にできるだけ輸入し、その一方にできるだけ消化し、吸収し、利用可能なものを今後に伝え、残骸をそのまま過去に残す。したがって、「少しの不順」を容認することは「防御」ではなく、実際には一種の「攻撃」である。：その中の一部は「不順」から「順」になり、一部は到底「不順」のために淘汰され、放棄される。)(筆者記)

これらを見ると、魯迅は翻訳を通じ、中国語を改革しようという意図があったことが分かる。ほかに、『現代日本小説集』(注29)に対し、一九二五年に芥川は「日本小説の支那訳」でこう書いた。

翻訳は、僕自身の作品に徴すれば、中々正確に訳してある。その上、地名、官名、道具の名等には、ちやんと註釈をほどこしてある。：

これを現代の日本に行はれる西洋文芸の翻訳書に比べてもあまり遜色はないのに違ひない。(注30)

この訳文を読んでいる時、芥川の中国語のレベルはわずかの単語を知るしかなかった。中国語をあまり知らなかった芥川はこのような言葉を書いたのは、恐らく魯迅の訳文の中で、原文から直接的に訳文に語彙、語順、文法、修辞を移入しただけでなく、原文の言葉と対応

させ、原文の言葉を逐一訳し、コンマ、ピリオドさえ一致させるところも多いだろう。芥川は中国語をあまり知らなかったたので、彼が言う「中々正確に訳してある」は信用できるかどうかまだ疑問が残ったが、ある程度、魯迅の訳文の特徴を反映していると言える。

魯迅の訳文と原文を比較分析すると、中には中国語表現の規範に反したところもあり、誤訳したところもあるが、魯迅の中国に言文一致を定着させる意図と中国語の表現を豊かにしようという意図を理解し、また現代との時代差による中国語の表現の差異を総合的に考えると、魯迅は確かに芥川の作品を理解していることが分かる。芥川が「羅生門」（一九一五年）と「鼻」（一九一六年）を発表した後、魯迅は「阿Q正伝」（一九二一年）を発表した。魯迅は日本から帰国した後、芥川の「羅生門」と「鼻」を翻訳し、中国に紹介した。魯迅はこの二作品をきちんと翻訳し、両作品の影響を受ける可能性がある。「羅生門」、「鼻」と「阿Q正伝」を比較する時に、魯迅は翻訳を通じ、中国語を改革することで、中国の民衆に先進的、科学的、民主的な思想を伝える意図持っていることを見逃してならない。

第二章 「羅生門」と「阿Q正伝」の比較研究

「羅生門」と「阿Q正伝」の作品内容においては、類似するところが多い。また、人物の内面においては、共通点も存在する。これからは「羅生門」と「阿Q正伝」を比較しながら第一節 下人と阿Qの社会的地位、第二節 世間の規則、第三節 下人と阿Qの性格、第四節 下人の「面皷」と阿Qの「癩瘡疤」、第五節 下人と阿Qの二回の心理変化、第六節 下人と阿Qのエゴイズム、第七節 下人の自己覚醒と阿Qの革命、第八節 下人の未来と阿Qの死亡に分け、分析する。

第一節 下人と阿Qの社会的地位

まず、「羅生門」全文を見通し、「羅生門」で登場した主人公は「下人」という職業で呼ばれ、一度も名前を呼ばれることがない点が確認できる。小説の中に、彼の年齢は詳しく説明されていないが、「右の頬に出来た、大きな面皷」は彼の若さを強調している。若いが、主人に「永年」に使われていたのは恐らく家庭が貧しく或いは家族が誰もいなく、家計のために幼い年から働いてきたためだろう。彼が着ている服装は「洗いざらした紺の襖」「藁草履」であり、「暇を出された」が、「行き所がなくて、途方にくれていた」点も、下人の貧しさを暗示している。当然教育を受ける機会もなかった。彼は「四五日前に暇を出された」のに、現時点においては羅生門というところにいたのは恐らく住所がなく、仕事も見つからないためだろう。しかしこのように「途方にくれていた」彼が「この衰微の小さな余波に他ならない」と言えるのは災いが深刻である一方、彼はただ下層社会に生活している人物であるからである。簡単に言うと、下人は名前が知られる価値もなく、住所も仕事もなく、生活に苦しみ、下層社会に生活している人物である。

「阿Q正伝」という題名を見ると、主人公の名前はきつと「阿Q」だと思われる。しかし、彼の名前について、「他活着的時候、人都叫他阿Quei」（生きていたころは、人々はみな阿Queiと呼んでいた）が、左証がなく、当てる字も見つからなかった。だから、「阿Quei」と書き、省略し「阿Q」と呼ばれる。彼の姓について、かつて一回「趙」と名乗ったことがあるが、真実であるか、嘘であるか分からなかった。或いは本当に「趙」と名乗るが、趙だんなの権威を恐れるので、言えない可能性もある。姓が分からないので、「籍貫」（出身地）も決定することが出来なかった。阿Qは「姓名」「出身地」が少々あいまいだけでなく、「行状」もあいまいである。阿Qの存在は未荘の人達にとっての価値はただこき使うと冗談を言う相手だけであり、これ以外のことは取るに足らない人物である。阿Qは家が無く、未荘の地藏堂の中に住み、一定の職業もないが、人に頼まれると日傭取になる。仕事之余の時には、臨時に主人の家に寝泊りし、済んだらすぐに出て行く。忙しい時に、人々は阿Qを想い出した。しかし、最後に誰も彼を呼ぶことはなかった。つまり、阿Qは人々にとって存在してもしなくてもよく、簡単に取って代わることができる存在である。阿Qは下人と同じく、名前も出身地も住所も仕事もなく、生活に苦しみ、下層社会に生活している人物である。

また、二人がいた場所も似ている。羅生門が、朱雀大路と外界との境界にあり、以前は繁栄していた場所だが、災いが続き、荒れ果てている。阿Qが住んでいる未荘の地藏堂も同じく、時の流れにつれ、廃れている。このような荒廃したところに身を寄せたというのは、二人とも世間から追い出された存在であることを暗示している。

ほかに、二人は現時点において、やむを得ず直面している状況も同じである。下人は羅生門の下で雨やみを待っていた。しかし、「雨がやんでも、格別どうしようも云う当てはない」。つまり、これからのことは、下人はどうにかしようと思っていた。阿Qも同様に、「阿Q却仍然没有人来叫他做短工」（だが阿Qは、依然として日雇いの口がかからなかった）。二人とも途方にくれ、目の前の苦境から切り抜けるために行動した。しかし、両者の間に違うところがある。下人は餓死するか、生きるために盗人になるか迷っていた。つまり、二者択一の問題である。阿Qは仕事を失い、手元に価値があるものや金もなく、腹が減ったので、おもてへ出て食を求めた。しかし、彼は本当に求めるものは物質より精神的なものだが、その時点、彼自身が気づいていなかった。

第二節 世間の規則

羅生門の下には下人だけいて、ほかに誰もいない。ほかにいるものは蟋蟀と鴉しかない。つまり、現時点では下人の周りに誰もいない。「どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んでいる違はない」と知りながら、なかなか決断できなかった。このことに對し、高橋龍夫氏は次のように述べた。

この時の下人は積極的な意志の働きを作動させることなく、センチメンタリズムの赴くままであり、誤解を恐れずに言えば、自己の感情や感性に対して理性による何の束縛も与える必要のない状態なのである。他者の不在のために、「すれば」における早急な問題解決（盗人という行為）に臨んだり、荒廃した京都でわざわざ夕刻に浮浪している理由（暇を出されたこと）を誰かに説明する必要もなく、いわば過剰な自意識を抱くことと無縁の状態なのであった。（注31）

つまり、この時に、下人は主人に暇を出されることにより、何の束縛もない自由の状態になる。また、周りに他者は全く存在せず、下人は何も気になくても自分の意志のままに行動できる。生きるためには当然ならなければならない「盗人になる」ことが分かった下人は、素早く盗人になることを決断しても問題がなかった。しかし彼はなかなか決断できなかった。彼は教育を受けることがないので、彼の行動を縛るのはこの世間のルールしかない。

下人にとってのルールは何であろうか。彼の年齢と羅生門に来る前の仕事、また働いた年月から、彼は幼い時から下人になることが推測できる。幼い年から、永年、働いていたので、彼は恐らく主人や周りの人々からいろいろ学んでいた。主人のこと、下人という職業の道徳のほかに、世間の規則も知った。主人から暇を出された下人は身体が自由になったが、精神

はまだ社会に束縛されている状態である。現時点で彼は主人との関係が切られ、この前に従わなければならない規則はその機能が失った。追い出されてからも下人は、依然として追い出される前の倫理に縛られていた。つまり、最後に彼の行動を縛るのは、人として守らなければならない論理であり、善悪に関連するものである。この点について、三好行雄氏は「なものかによって行為を封じられた人間」と評し、そしてこの「なものか」を「人間としての最後の倫理」、「超越的なモラル」と読み、また下人の「行為の勇氣」を奪ったのは、この「法を超えた超越的な倫理」であると結論付けている。(注32)

阿Qも同じである。未荘に住んでいる人々は理由もなく地位の高い人を尊敬し、低い人をいじめる。阿Qは「他和赵大爷原来是本家」(彼はもともと趙だんなどは同族である)だけを言い、「其时几个旁听人倒也肃然的有些起敬了」(この場においてこの話を聞いた連中は、ひそかに舌を巻いて、少なからず畏敬の念をいだいたものである)。阿Qはこのような話をしただけで、趙だんなに叱られ殴られた。阿Qは悪いことをしたかもしれないが、本当に悪いことをしたのは趙だんなのである。しかし、「知道的人都说阿Q太荒唐，自己去招打；他大约未必姓赵，即使真姓赵，有赵大爷在这里，也不该如此胡说的」(そのうわさをきいた連中は、口口に、阿Qはあまりデタラメなことを言うから、自分から殴られるような目にあうのだ、かれはおそらく趙という姓ではあるまい、たといほんとうは趙という姓であったにしろ、れっきとした趙だんがいる限り、めったなことは口に出して言うものではない、と評しあつた)。阿Qの姓は趙かもしれないが、趙だんと同じ姓である故に、名乗ることさえこの世間では許されないことになる。被害を受けた阿Qは、この世間で何の理由もなく、周りの人々により、かえって自業自得の存在になる。また、阿Qは普段人々にいじられる存在なのに、「然而阿Q虽然常优胜，却直待蒙赵大爷打他嘴巴之后，这才出了名」(しかし阿Qは、つねに勝利は占めていたものの、有名になったのは趙だんになぐられて以来のことである)。「至于错在阿Q，那自然是不必说。所以者何？就因为赵大爷是不合籍的。」(むろん、非が阿Qのほうにあることは言うまでもない。なぜか？趙だんなに非のあろうはずがないからだ)と皆は思うが、ただ「趙だん」というような偉い人と関係づけるだけで、阿Qを尊敬するようになった。このような環境で生きる阿Qも影響を受けていた。阿Qは「権力者」である趙だんの前に、叱られても殴られても黙秘し続け、反対さえしない一方で、若い尼を勝手に弄んだ。若い尼を弄んだのは自分の悪い気分を晴らすためだけでなく、周りの人の機嫌をとるためである。彼は周りの人々にあざけられると同時に、彼らの目が気になっている。阿Qというような何もない人間は人目によって自分の価値を確かめる。このような環境の下で生きる阿Qは、周りの人々と同じく地位の高い人を尊敬し、低い人をいじめる。換言すれば、阿Qは下人と同様に、生きる間に無意識にこの世間のルールに縛られていた。

下人も阿Qもこの世間のルールに縛られていたが、ルールの内容が異なっている。下人にとっての世間のルールは他人と関係なく、自分の心であり、善悪に関連するものである。阿Qはそうではない。阿Qにとっての世間のルールは善悪に全く関係せず、完全に周りの人々の行動を基準とするものである。

第三節 下人と阿Qの性格

四五日前に主人から暇を出され、「行き所がなくて、途方にくれていた」下人は、生きるためには自分の目の前に二つの選択肢だけあると思ひ込んでいた。生きるためには、手段を選んでいる違はないと分かっていたいながら、それを積極的に肯定するだけの「勇氣」を持ってない下人は、餓死か悪事かという二者択一を負いながらも、なかなか決断が出来なかった。「下人は、大きな嘔をして、それから、大儀そうに立上った」。彼は、「雨風の患のない、人目にかかる惧のない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思つたからである」。下人に餓死の問題が切迫しているわけではないが、若々しい体力もまだ十分残っているのです、目の前のことを先送りしたまま、「ともかくも」一夜をやり過ぎようと決めた。彼は「盗人になるより外に仕方がない」という結論に対し、ためらう処理方法を取るの**は彼の優柔不断のせいである。**

また、原文ではこう書いた。

どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んでいる違はない。選んでいれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。

つまり、今の下人にとって、生きるために、手段を選んでいれば、どうせ餓死になり、ただ死ぬ場所の区別がある。「選ばないとすれば―下人の考えは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やっとこの局所へ逢着した」。この「何度も同じ道を低徊した」というのはほかの方法があるかもしれないが、現在の下人の知識面では盗人になるほかに何もできなかった。彼は今の時点で二者択一の状況に遭つたが、優先的に考えたのが「盗人」になることである。その後の「しかしこの『すれば』は、いつまでたつても、結局『すれば』であった」のは下人が「餓死」か「盗人になる」かの間に迷いながら、やはり「生」に傾いた。しかし彼は餓死することを全く考えたことがない訳ではない。彼はまたこの世間のルールに縛られ、盗人になることにまだ抵抗性が残っていた。「盗人」になることも、「餓死」することも、両方とも積極的に実行できない下人は、その優柔不断さが存在する。

「羅生門」で最初からその異常性を説明した。まずは「この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云う災がつづいて起つた」影響で、羅生門は「狐狸が棲む」ところ、「盗人が棲む」ところになった。そのうえ、「引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行く」と云う習慣さえ出来た。「鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである」。「その崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える」。現時点での羅生門は既に廃れ、汚く、人気も一切なかった場所である。そして、この日は雨が降り、夕方の時に、広い門の下には、下人のほかに誰もいなかった。日がだんだん暗くなり、夕冷えになり、風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける羅生門の下でまた誰かがここに来るのはありえないことになる。ただ「雨風の患の

ない」「人目にかかる惧のない」「一晩楽にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである」ことを思う彼は偶然「門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子が眼についた」。

廃れ、汚く、人気もない羅生門、雨が降り、日が暗く、温度が低くなる環境、見えにくい楼の梯子、このような状況では門の下か門の上かと関わず、下人のほか誰もいないことを誰でも信じていた。下人も同じ、「上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである」と信じていた。また彼は手ぶらの状態ではなく、腰に太刀をさげた。このように若く、しかも昔使用人であり、強い武器を持つ男性は決して弱い存在ではない。それでも、下人は用心深く行動した。

そこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

彼は羅生門の楼の上へ出て、幅の広い梯子の中段に、猫のように身をちぢめ、息を殺しながら、上の容子を窺っていた。彼は自分が安全だと判断しても、自分の安全を守っても慎重に進んでいた。さらに、火の光を気付き、その上に誰がいることを気づいたら、先よりもっと慎重に進んでいた。

守宮のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平らにしながら、頸を出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗いて見た。

どんなことに遭っても、この態度は下人の本能とも言えるだろう。「生」と「死」の間に彷徨っている下人は確かに「生」の方に傾いた。

この一連の動作から、下人の用心深い性格が窺える。

「阿Q正伝」では、阿Qのものの見方に矛盾するところが存在する。例を挙げると、未荘と城内に対する態度について、彼の態度はまさに矛盾している。人々は城内に憧れ、田舎である未荘を軽蔑することが普通である。この点について、「加以进了几回城，阿Q自然更自负」（加うるに彼は、城内へも何回か行っているので、自尊心の強くなるのも当然であった）からも阿Qの態度が見られる。しかし、「他又很鄙薄城里人」（城内の連中をも彼は軽蔑していた）。つまり、城内に対し、阿Qは見上げると同時に見下げている。また、城内の腰かけの呼び方とたいのから揚げに入れた葱の形は未荘と違うので、阿Qは「这也是错的，可笑」（これはまちがっている、おかしい話だ）と考え、未荘人の誇りを持ち、城内を蔑んでいた。しかし、彼は未荘に対し、「然而未庄人真是不见世面的可笑乡下人呵，他们没有见过城里煎鱼！」（ところで未荘のやつらは、世間知らずのおかしな田舎者ときているから、城内の魚のから揚げさえ見てやしないのだ）と思った。彼は未荘に対し、同じく見上げると同時

に見下げた。完全に異なる二つのものに対し、同じく見上げると同時に見下げているということまさに矛盾している。下人の性格にも矛盾するところがあるが、根本的に分析すると違っている。行き所がなく、途方に暮れる下人は「盗人」になるか「餓死」するかの境目に追い込まれる。彼は「生」のために「盗人」になりたいが、なかなか決断できなかった。下人の性格について、駒尺喜美氏はこう述べた。

(前略)善と悪とを同時に並存させているところの矛盾体である人間そのものを、さしだしていると思うのだ。(注33)

人間というものは根っから善と悪をもちながら生きる存在である。普通に外見から見えにくいのが、極端な状況の場合にもれなくばれてしまう。阿Qはそうではない。彼の見方の矛盾は全部彼自身の「精神的勝利法」に基づいている。

阿Qは高い地位がなく、財産もなく、家族もいなく、人脈もなく、力も強くない、教育を受けたこともなく、特別な技術も持てなく、ほかの人と比べると、どんな方面でも勝つところもない。周りの人は勝手に彼をいじめ、彼は自分の惨めな境遇を直視できなく、現実から逃避し、自分で拵えた架空の世界に入り込んでいた。彼は閑人達にいじめられ、勝つこともなく、最後にいつもどこかの壁に頭を五つ六つぶっつけられた。この行動は子供が父親を打ったことと思いい、自分を慰める。時には自分は自分を軽蔑できる第一人者なりと思う方法で、自分も状元のように偉い人だと思いい、自分を欺瞞する。どうしても気分を晴れない時、自分は自分を殴り、別人を殴るみたいに想像する。簡単に言うと、阿Qは「精神的勝利法」を通じて、形式上での失敗を精神上の勝利に変え、自分の存在の意味を保っている。そして、彼はいつもつまらないことから自分の存在感を探している。城内の腰かけの呼び方、たいのから揚げに入れた葱の形、口頭上の言葉、身体から取られる虱の数と嘔み潰す響の大きさをえある。

未荘に住んでいる人々は理由もなく地位の高い人を尊敬し、低い人をいじめている。趙だんなは未荘で頂点に立っている人物とも言える。その理由だけで人々の心の中で、趙だんなとは神聖な存在であり、彼の言葉や行動など全部間違いなく正しいものである。そして趙だんなと少し関係をつけた人に対し、彼らも思わず尊敬するようになる。趙だんなに殴られたというようなことで、皆は思わず阿Qを尊敬する。このような環境で阿Qも知らないうちに、このような習慣を馴染んでいた。彼は大層自尊心が強く、思想上で未荘の人が誰も彼の眼中になかった。しかし、趙だんなと関係を付けられることは彼自身にとって光栄なことであり、ほかの人より地位が高いと思いい込んでいた。また阿Qは趙だんなの非難に対し、一言も弁解をせず、反抗もしなく、黙って彼らに叱られ殴られ、金を強請られた。未荘の閑人達にいじめられる時に、彼はいつもにらみつけ、或いは自分を軽蔑する。彼は強い人を恐れ、彼らの前に、いつも言いなりになっている。その一方、彼も弱い人をいじめ、その中から享樂する。彼はいつも相手を見積り、口べたな相手なら罵倒し、弱そうな相手ならつかかっている。

彼はひげの王と錢だんなの長男から受けた屈辱を勝手に偶然に会った靜修庵の若い尼の身にもらした。彼女のいじめを通じ、自分が受けた屈辱を忘却する。つまり、阿Qは「欺軟怕硬」という性格がある。

また、阿Qは強い封建思想を持っている。この思想は恐らく彼が生まれてから周りの環境から影響を受けたものであろう。例えば、錢だんなの長男の辮子のことである。中国の清朝末期では、「剪辮运动」（辮子を切る運動）が起こった。清王朝に入り、満州族の皇帝は漢族人の思想を控え、または統治を固めるために、漢族人に「剃髮易服」（髪を剃り、服を変える）という制度を強制した。漢族人はずっと昔から「身体髮肤受之父母」（身体髪膚これを父母に受く）という観念が深まっていたが、「留頭不留髮、留髮不留頭」（頭を残せば、髪は残らない。髪を残せば、頭が残らない）を実行するために、「一个不剃全家斩、一家不剃全村斩」（一人が髪を残せば、家族全員は殺される。一家は髪を残せば、村全員は殺される）という制度さえ出てきた。男子は髪を剃り、辮子を編むことは征服される意味であり、清王朝が中国を統治する重要な標識でもある。辛亥革命によって満州族統治の清朝が倒れ、中華民国が建国された。その時に漢族人に辮子を切らせた。つまり、この辮子は清王朝に支配され、身体でも思想でも、まだ解放されていない象徴とも言える。錢だんなの長男の辮子が切った行為は先進思想を代表しているが、その時代では、祖先から代々に受け継がれている伝統を破る行為だと認められ、絶対に許されないことである。だから、彼の母親は十数回泣きわめいたし、彼の細君は三回井戸へ飛び込み、強い反対をした。「本来可以做大官」（えらいお役人になれるはずでした）という言葉からこの世間の様子が窺える。阿Qも同じである。「阿Q尤其“深恶而痛绝之”的，是他的一条假辮子。辮子而至于假，就是没有了做人的资格」（ことに阿Qが、「深刻に憎悪」したのは、カツラの辮髪であった。辮髪がカツラであるに至っては、人間としての資格がゼロである）。辮子を人間の資格として認めていた阿Qは封建思想の産物である。女性に対する態度からも彼の封建思想が窺える。中国では昔から男は、一族の血統を継承する役割を担っている。だから、「不孝有三，无后为大」（不孝には三つの種類があつて後嗣あつとぎが無いのが一番悪い）という習慣が生まれる。ほかに彼も「男女之大防」（男女に別あり）を知った。しかし、阿Qの女に対する学説では、女は必ず男を誘惑する存在である。彼は「こいつはきっと男を連れ出すわえ」と思うような女に対していつも注意していたが、証拠を見つからないと、女たちは、ことごとく「ねこをかぶって」いると思うようになった。彼は自分の行動に言い訳を付けがちである。自分を有利な面に考える角度から見ると、精神的勝利法と相当に類似している。

阿Qは勝手に女が男を誘惑する存在だと思ひ込んでいた。だが、実際にそうではなかった。世の中では女に対し、全然優しくなかった。阿Qの求愛に対し、呉媽は激しい反応をしたのは、阿Qの行動に驚いたほかに、身分の高低差の可能性もある。阿Qは日雇いであり、呉媽は女僕であり、二人の身分は大きな差がないが、呉媽は趙家の人だけで、二人の立場の距離はどうしても越えられない。呉媽は阿Qを見下げる可能性もあり、だから彼の行動を予想できなかつた。しかし、一番重要なのは、阿Qのわがままな行動は呉媽に死をもたらす可能性

がある。昔から、中国社会では男が主宰の立場に立ち、女が男の付属品だと認められ、その地位もだんだん低くなった。儒教の思想の影響の下で、女の行動も思想も厳しく規範されていた。女は必ず夫以外の男性と距離を持たなければならない。夫が死んでも、女は再婚できなく、必ず夫に始終忠実しなければならぬ。男女の間に何があっても、全部は女のせいにする傾向が強かった。時に、女は自分の潔白を証明するために、自殺したこともある。その故、阿Qの行動により、呉媽は世間で男を誘惑し、不潔な存在と認められ、死に迫られる可能性がある。

また阿Qが「小孤孀上坟」（若後家の墓参り）をよく歌っていた。また彼は呉媽を向かい、いつも「若後家」という言葉を思い出した。「若後家の墓参り」は紹興地方の芝居である。内容は夫を失った若い女の悲しみと切なさを表れる。このような同情を引き起こせる歌は阿Qのところで、簡単に歌えるものになった。この点も封建社会で女性の地位を窺える。

第四節 下人の「面炮」と阿Qの「癩疮疤」

「羅生門」で下人の容貌描写について、はつきりされていない。ただ、その中に、下人の「面炮」に関する描写は四箇所がある。下人の面炮は一方に彼の若さを象徴する。その一方に、彼の心理や行動と合わせ変化している。それらの描写は次に挙げる。

- ① 下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面炮を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。
- ② 楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿を持った面炮のある頬である。
- ③ 勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面炮を気にしながら、聞いているのである。
- ④ そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面炮から離して、老婆の襟上をつかみながら、嘔みつくようにこう云った。

この四点から見ると、下人の行動についての描写が、下人の持っている面炮によって反映されている。その同時に、彼の心理変化も反映されている。面炮の変化は簡単にまとめ、① 大きな面炮② 赤く膿を持った面炮③ 赤く頬に膿を持った大きな面炮、という順番である。④ は右の手を面炮から離す動作であるが、彼の心理変化によってその後の動作を暗示している。「面炮」について、王書璋氏は以下のように分析した。

最初の「大きな面炮」は、単なる若者の象徴であり、リアリティーを増やすための小道具であるが、しかし、下人が「盗人になるよりほかに仕方がない」と考え始めると、「大きな面炮」が、「赤く膿を持った面炮」に変化するのである。「人になる」という「悪」の意念が芽生ええると、「膿」ができたと推測できる。ここから、この「膿」は「悪」の象徴と解釈

することが可能であると言える。清水康次は「赤く膿を持った面炮」に示されるように、下人の内に力はある。しかし、その力は倫理や論理によつては行為に結びつけず、力を行為に変える「勇氣」が欠けている。」と指摘している。清水の言う「下人の内の力」は「悪」の力であるとも考えられる。この力が、「倫理や論理によつて」しばらく抑えられていたが、やがて生きるために、抑え切れなくなる。後の文章を読んでいくと、下人は、善を守って餓死するか、それとも悪を気にすることなく盗人になるかを決める前に、「赤く頬に膿を持った大きな面炮を気にしながら、聞いてゐるのである」が、しかし、老婆の「わしのしてゐた事も悪い事とは思はぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするぢやて、仕方がなくする事ぢやはいの。」というせりふを聞いた後、「一足前へ出ると、不意に右の手を面炮から離して、老婆の襟をつかみながら、噛みつくやうにかう云つた」という行動を取る。「隠す」という行為は、下人の心にはまだ倫理や道徳が残っていることを意味していると思われる。だが、決断するやすぐに、「手を面炮から離す」下人の行動は、「悪」の象徴としての面炮を気にしなくなったことを意味すると解される。まさに盗人になるという「悪」の行為を堂々とすることを選んだといえる。(注34)

面炮の変化により、下人の心理は変化し、結局「悪」の道に進んでいった。

阿Qも体の欠点がある。それは「癩疮疤」(おできのためにはげていること)である。「癩疮疤」は疥癬の原因で禿げたところの痕跡である。中国では疥癬の多発の時期は春と夏、原因はほとんど環境の不潔、相互の伝染、人体の栄養不良である。これらも阿Qの生活に合っている。彼は家もなく、日雇いをしていた。活動範囲が広く、毎日数多くの人と接触していた。未荘の地藏堂に住み、手元に恐らくぼろ上衣、ぼろ袴、ズボン、帽子、綿入れ、ふとんとわずかな金だけがある。廃棄された住所で、生活用品が少なく、環境はきれいだと言にくい。不安定な日雇いをし、自分の健康状態を保たれなかった。また、彼の頭の皮の表面にいつ出来たものかざいぶん幾個所も瘡だらけの禿があったのは、彼はその意識がないあるいはその余裕がないかもしれない。

「癩疮疤」について、阿Qも下人のように自分の「癩疮疤」を気になっている。「他讳说“癩”以及一切近于“赖”的音,后来推而广之,“光”也讳,“亮”也讳,再后来,连“灯”“烛”都讳了」(彼は「はげ」という言葉、および一切の「はげ」に近い発音がきらいであった。後になると、それがしだいにひろがって、「光る」も禁物、「明るい」も禁物になった。さらに後になると「ランプ」や「ろうそく」まで禁物になった)。古代の中国では、「避諱」という習慣がある。『春秋公羊传・閏公元年』で「为尊者讳,为亲者讳,为贤者讳」という言葉がある。簡単に言うと、目上の者の諱を用いることを忌避し、特に皇帝および祖先のことである。しかし、阿Qは貴族でもなく、子孫や生徒もない、この避諱の行動は彼の立場から見ると、完全に無関係である。普通ではプライドがあるのは悪いことではない。しかし、阿Qのような身分が低い人間は皇帝ほどの自尊心を持つのは相当に皮肉である。彼のプライドの異常性を強調している。彼のプライドを維持できない時、自分を軽蔑できる道を選ん

だ。その後も自分が自分を軽蔑できる第一の人間であることで、プライドを維持している。極端なプライドと極端に自分を軽蔑するのは阿Qの性格の矛盾するところとも言え、自分の内心の世界を守るための自己欺瞞とも言える。

阿Qの容貌描写について、下人と同じく、「癩疮疤」の以外にはつきりされていない。阿Qの「癩疮疤」に関する描写は以下のように三箇所ある。

⑤最惱人的是在他头皮上，颇有几处不知于何时的癩疮疤。

(第一の悩みの種は、彼の頭の皮膚が数か所、いつからともかく、おできのためにはげていることである。)

⑥“你还不配……”这时候，又仿佛在他头上的一种高尚的光容的癩头疮，并非平常的癩头疮了。

(「おめえなんかには……」彼は、彼の頭上にある高尚な、りっぱなはげであって、あたり前のはげでないことを考えていたのである。)

⑦他癩疮疤块块通红了，将衣服摔在地上，吐一口唾沫，说：“这毛虫！”

(彼は、はげのひとつひとつをまっ赤にして、着物を地面へたたきつけるなり、ペツとつばを吐いてどなった。)

「毛虫野郎め！」

中国では昔から「面由心生」という言葉がある。人相は心の表れであり、生き様の表れであるので、阿Qの身体上の欠点である「癩疮疤」(できのためにはげていること)は彼の精神上の欠点とも言えよう。彼の心理や行動と合わせ、「癩疮疤」も変化している。⑤は作品で初めての阿Qの「癩疮疤」の描写である。阿Qは「疥癬」に感染する原因は前述のように、感染の原因は人為より自然的な原因に近づく。阿Qの「癩疮疤」は彼の精神上的の欠点だとすれば、この「精神上的の欠点」の源は彼が生活している社会だろう。彼はこのような環境に生話し、周りの人の影響を受け、知らないうちに、精神上的の欠点が生まれた。⑤は阿Qの現時点の状態の描写である。⑥では彼の心理変化が描かれている。普段「恥」と思われる「癩疮疤」は、ただ彼にとつての復讐の話の思い出せることで、一種ある高尚な、りっぱなはげに変化した。彼はささやかなことさえ利用し、自己を欺瞞し、自分が受けた屈辱を忘却する。⑦でははげのひとつひとつをまっ赤にしたのは、阿Qは自分が見下げたはげ王に負けることに怒ったからである。怒りが強いので、ひとつひとつをまっ赤にした。ここで、阿Qの心理変化は生き生き描かれ、彼の負けたくない心理を強調している。

下人も阿Qも身体上の「欠点」がある。二人の欠点も彼の心理や行動と合わせ変化している。しかし、二人の「欠点」が違う。下人の欠点である「悪」は元々なかったが、彼が窮地から脱しようとする時から、「悪」が生まれはじめた。阿Qはそうではなかった。彼は身体上の欠点は精神上的の欠点を暗示している。彼は生まれてから、この世の環境から自然に彼の精神に影響を与えていた。彼の精神的勝利法や奴隷性などはこの社会気風の産物である。

第五節 下人と阿Qの二回の心理変化

「羅生門」で下人の行動に焦点を置き、下人の心理変化を描いた。一回目の心理変化は以下の通りである。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいる違はない。：「盗人になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

二回目の心理変化は楼の上で老婆と出会い、老婆から「これとてもやはりせねば、餓死をするじゃや、仕方がなくする事じゃわいの」という言い訳を聞き、「これを聞いている中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た」。この後、下人は老婆の着物を剥ぎとり、蹴倒し、外に行った。羅生門という場所で下人は重要な心理変化を二回体験した。最初、目の前の窮地から脱したいなら、客観的な問題を解決するために、「盗人」になるしかないと知っていたながら、主観上では勇気がなかなか出せなかった。その後、楼の上で老婆の死骸から髪の毛を抜くことを目撃した下人は老婆の言い訳を聞いた後、論理の束縛から解放され、主観上で勇気ももらった。

「阿Q正伝」で阿Qの遭遇、行動を中心に描かれた。その中で、阿Qは二回の心理の変化が起こった。

一回目は呉媽に求愛したせいで、趙家での日雇いを失った。また、その影響で、馴染みの家も彼を雇わなかった。仕事を失い、手元にお金がなく、腹が減ったので、阿Qはおもてへ出て食を求めた。最後に庵の野菜畑に入り、大根を盗んだ。二回目は革命党の謠言がなかなか盛んでいた時、百里四方にその名を知られた挙人だんなさえ縮みあがらせることを聞いた阿Qは革命を憧れるようになった。一回目の時の阿Qの性格は、彼の行動から分析する。阿Qという人物は何の取柄もないが、忙しない時にはいつも阿Qを想い出した。「阿Qはよく働く」という理由だけでは、説得力はまだ足りない。阿Qは確かに時にほらを吹いたり、喧嘩をしたり、いじめたりすることがあるが、彼は今まで罪を犯したことがなかった。しかし、阿Qは空腹を満たすために、初めて犯罪した。阿Qはしばらくためらっていたことも、ぶるぶるふるえた足も彼の緊張感を強調している。今回の盗みは次の泥棒になることの下地とも言えよう。今までしたことがなかったことをしたことは、阿Qが初めて自分を変えることを窺える。今回の空腹をきっかけに、阿Qは微かに自分の精神欲望を気付き、初めて昔の生活状態から抜け出した。二回目の時、阿Qは革命を憧れるようになった。本来、阿Qにとって革命は謀反と同様、彼自身によくはないと思っ込んでいた。地位が高い挙人だんなが革命党を恐れたことを聞いた阿Qは初めて革命のメリットを知った。この時の阿Qは革命の意味が分からず、ただ自己満足のためである。阿Qはプライドが高い人物である。彼はいつもいじめられていたが、精神的勝利法を利用し、自分のプライドを維持している。一回の失

職と飢饉を経験した阿Qは城内に行ったことにより、金持ちになった。金持ちになった阿Qは未荘に戻り、周りの人たちは思わず彼を尊敬するようになった。一度も阿Qを相手しなかった趙だんなさえも阿Qの機嫌を損ねたくなかった。阿Qも精神的勝利法を使わず、人々の前に、自然にその優越感を自慢した。昔から想像しかできない自尊心は現実で維持され、彼は自惚れ、趙だんなに対しても、傲慢になった。しかし、この優越感は間もなく失った。未荘の人たちは阿Qの好運を羨んでいると同時に、彼を妬んでいた。不利な噂と閑人達の節介のせいで、未荘の人たちは意識的に阿Qから遠ざかった。もともとプライドが高く、一度に畏敬を味わった阿Qはその感覚を取り戻すために、革命を憧れ、革命党の名をつけた。彼は昔から趙だんなや未荘の人たちにいじめられ、反抗もしなかった。革命のことを知った時、阿Qは初めてあいつらが悪いことに気が付き、あいつらに復讐したいようになった。この時の阿Qは革命の意味がまだ分からなかったが、反抗の意識が芽生えた。

下人と阿Qは目の前の苦境に対し、外来の影響で敢えて自分を変えようとする。下人は老婆の言い訳を聞き、盗人になる「勇氣」をもらった。阿Qは他人からのいじめに対し、反抗し始めた。しかし、二人の間に程度の差がある。下人は自分が勇氣がないことを知り、老婆の言い訳からその勇氣を獲得した。阿Qは自分がほしいものの正体がわからなく、困難に遭ったにつれ、ますます自己覚醒になった。

第六節 下人と阿Qのエゴイズム

「羅生門」では下人は最初に老婆に気づいた時、「六分の恐怖と四分の好奇心」を抱いた。その後、「その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行った」。そうして、「それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た」。この時の下人の気持ちはずでに最初の「六分の恐怖と四分の好奇心」から「悪を憎む心」へ変化した。盗人になる意図が老婆の行動を見た時に、完全に消えた。

下人には、「勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった」。従って、「合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった」が、下人にとっては、「この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった」。下人は老婆が髪の毛を抜いた原因がわからなかったため、簡単に彼女に罪を見出したのは良くない。しかし、下人にとっては髪の毛を抜いた理由に関わらず、目の前で起こったことは許すべからざる悪と判断した。つまり、下人は原因より結果を重視する傾向がある。

下人は「あらゆる悪に対する反感」において、老婆を捕えた。「老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した」下人の「憎悪の心」は「ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足」になった。主人に追い出され、行くところがなく、無意識に羅生門に着いた下人はこれからの生活に苦しんでいた。生きるために、今まで遵守した論理を破らなければならない。つまり、下人は今の状況に陥るまで、彼は自分の意志がほとんどなく、始終受け身の立場に立っていた。老婆の反応を見た下人は、老婆

を完全に支配できることを意識した。今まで受動的に行動してきた下人は、老婆の姿から自分も能動的に行動することを意識し、初めて自分の意志が生まれた。彼はこの感覚に陶醉し、先ほどまで燃えていた嫌悪の心を冷ましてしまった。

正義感の下で行動した下人は乱暴に老婆を扱った。しかし、「老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した」下人はさっきの質問をもう一回に老婆に聞き、態度を変え、声を柔らげ、詳しく自分の身分を説明した。彼は完全に老婆を支配しているが、この方法で老婆から期待する回答をもらえなかったため、彼は方法を変えた。彼は強制的な態度を変え、誘導する方法で警戒心が強い老婆から理由を求めた。彼は老婆の前に、彼女に対する支配的権利を放棄するふりをし、自分を「この門の下を通りかかった旅の者」と偽装し、老婆が自らその理由を言うことを誘導した。

どうして下人は老婆の答えにこだわったのか。彼はわざわざ老婆に髪の毛を抜いた理由を聞いたが、実際に聞く必要はなかった。どんな理由があっても、結果を重視した下人にとってはいずれにせよ悪そのものだけである。彼が老婆を脅すほど、わざわざ老婆に理由を聞いたのは、特別の理由を期待しているからである。だから、かつらにしようという平凡な回答を聞いた下人は失望した。「そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しよに、心の中へはいって来た」。

「すると、その気色が、先方へも通じたのであろう」。なぜ老婆は下人の気持ちの変化を察知できるのか。彼女の直感によるかもしれない。その他に、老婆の性格にも関係づけているだろう。下人に気付いた後の老婆の反応から見ると、老婆自身も用心深い性格を持っている存在である。そもそも京都は近年災いが続き、下人のように長年雇われている若い人さえ追い出され、これからの生活に悩んでいて、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆は羅生門という廃れたところにいることは不思議である。老婆は、一目下人を見ると逃げようとした。性別、年齢、体力など表面だけで老婆は下人に敵えないと判断できる。それにも関わらず、老婆は一生懸命抵抗していた。下人に捕まえられても、抵抗の態度を取り、黙り続けていた。相手は検非違使の庁の役人であることを恐れ、自分を守るために黙る態度を取った。この後、自分が検非違使の庁の役人ではないと老婆に説明しても、依然として「見開いていた眼を、一層大きくして、じっとその下人の顔を見守った」。下人の態度が急変したので、老婆に衝撃を与えた。だから老婆の眼は、「一層大きく」なった。彼女がじっと下人の顔を眺めていたのは、彼が嘘をついたかどうかきちんと確かめたいからである。つまり、下人に対し不審の念を抱いていたからである。老婆が下人の話を信じたか否かははっきりされていないが、老婆の用心深い性格が読み取れる。両者の間には絶対の力の差があり、老婆は下人に反抗したくても反抗できない。この点について老婆は端的に分かったので、下人の質問に対し、問い返さずに答えた。そして、下人は太刀を鞘におさめても、声を柔らげても、彼の言葉からは老婆を脅すニュアンスも窺える。まず、下人は自分が検非違使の庁の役人ではないことを老婆に伝えたが、何の証拠も出さずに済ませた。そもそも下人は支配する立場にいたので、証明する必要もなかった。老婆は支配される立場にいたので、彼女に言い

返す権利はなかった。この状況で老婆は下人が言うことが真実だと承認せざるを得ない。検非違使の庁の役人であるかどうか、実際に老婆にとって区別できなかった。下人は完全に老婆を支配する立場に立つだけ、老婆に縄をかけ、どうしようというような事は全部下人の意志次第である。下人の「己は検非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようと云うような事はない」という言葉は実際には意味がなく、ただ老婆に交換条件を提示するのみである。つまり、「私は何もしないので、その代わりに回答してほしい。もし、黙り続けていたら、これからどうなるかは保証できない」というような老婆を脅す言葉である。それを十分理解した老婆はおとなしく答えた。

老婆は自分の理由を下人に言い出した。しかし、下人にとって期待は裏切られた。下人の憎悪と侮蔑を感じた老婆は自分が下人に支配されることを知り、自分の安全を守るために、彼女は下人を説得しなければならぬ。

しかし、老婆は一生懸命に自分の理由で下人を説得しようとするが、下人は老婆の言い訳を冷然と聞きながら、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面砲を気にしていた。つまり、下人のほうは真面目に聞いていなかった。しかし、「これを聞いている中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇気である」。

下人がもらった「勇気」の由来は何だろうか。それは老婆の言い訳からもなかった。死人の髪の毛を抜くということは、普通の人にとって非常に悪い事かも知れないが、彼女にとって悪い事とは思わない。理由は一つ目として生きるために、悪いことをしても仕方がない。二つ目として死人どもは生前生きるために悪いことをした。彼たちはこのようなことをよく知っていたので、同じ行動を取られても許される。老婆は「成程な、死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ」と言ったが、これはあくまでも曖昧な言い方である。実際に死人の髪の毛を抜くのは明らかに悪いことだという事実が老婆にはよく分かっていた。なぜなら、彼女は下人を検非違使の庁の役人に見違えた時に、逃げようとする動作とその後沈黙は彼女の犯行の証拠からである。検非違使の仕事は殺人・強盗・謀叛人などの逮捕が中心であるので、老婆が悪いことをしていない限り、逮捕される可能性はなかった。また、老婆の行動を見る前に下人は盗人になろうというつもりもあつたが、老婆の行動を見た瞬間に全部忘れた。下人の前後の反応の変化から、老婆がしたことは絶対いいことではないことが分かった。しかし、彼女は下人の前に断言の言い方を止め、曖昧な言い方を取ったのは、下人を説得するために、自分の行動を合理的に説明する必要があるからである。起こった事実の前に、老婆は動機と対象の二つの点に力点を置き、説明した。まず、動機である。老婆にとって「今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじゃやて、仕方がなくする事じゃわいの」。つまり、生きるために、悪いことをしても仕方がない。この動機があるので、老婆は悪い加害者の立場から世間に追い詰められた被害者に変えられる。次は、彼女が選んだ対象である。「ここにいる死人どもは、皆、そのくらしいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ」。髪を抜いた女もその中の一人であり、

全部悪い人ばかりである。老婆が選んだ対象は無罪者が一人もいなかった。しかし、老婆の話は本当に真実かどうか疑問が生じる。今まで生き残った老婆が犯罪者だけに手を出したか、ここにいる死人どもは本当に悪い人か、下人には確かめる方法はなかった。そもそも下人が見たのは老婆が死人から髪の毛を抜くことだけである。もしここにいる死人どもは本当に悪い人だとすれば、老婆の行動は悪いことをした人たちに罰を与えたことになる。正義の立場に立っていることになる。もし老婆が言ったことが嘘だとしても、死人は反論できなく、初対面である下人は信じるしかなかった。つまり、どんな立場にいても、老婆は相当の理由を持っている。そして、老婆にとって、これらは悪い事とは思わない。さらに、老婆は自分の行動の合理性を証明するために、髪を抜いた女の身を利用した。老婆は下人にこう説明した。

昔、女は生活に苦しんでいた。彼女は生きるために悪いことをした。今、わしも彼女のように苦しんでいたので、彼女と同じことをしただけである。こんなことがよく知っていた彼女はきつとわしを許す。

老婆は女を自分の立場に立たせ、当事者である彼女は老婆を許したであろうとした。髪を抜かれた女が老婆を許せば、下人は老婆が犯罪者だと結論を下せない。しかし、これらは全部老婆の言い訳である。なぜなら、どんな理由があっても、結果として老婆がしたことは紛れもなく悪事だからである。そして、その理由も説得力が足りない。老婆がここにいる死人どもは全部悪い人と言った。当然下人はその事実を確かめることができなく、同時に老婆は自分の言葉の真実性を証明できない。老婆は自分の行動が許されると主張したが、同じ境遇に遭っても、自分がしたことを他人にされるわけではない。説得力が足りない老婆と実際に目撃した事実の間に、下人は当然に自分が見たことを信じていた。説得力が足りない理由を利用し、自分の行動を正当化する老婆の姿を見ていた下人はその中に老婆への信頼性を失いつつあった。だから、老婆は出来るだけ下人を説得したいが、失敗してしまった。しかし、老婆の言い訳を聞いているうちに、彼は老婆からあるものを学んだ。それが自分を騙した「言い訳」である。生きるためには、手段を選んでいる違はないと分かっていた下人は、それを積極的に肯定するだけの「勇気」がなかった。羅生門の楼に上った下人は老婆の行動を目撃した。彼は老婆から死人の髪の毛を抜く特別の理由を期待した。なぜ彼は特別の理由を期待したか。現時点で、下人がほしいものは「盗人」になる合理性しかない。彼は恐らく老婆の答えからその「勇気」を求めている。しかし、彼は「勇気」をもらえなかった。その代わりに、老婆から「言い訳」をもらった。彼は老婆のように「言い訳」を利用し、自分を騙す方法で、その勇気ももらった。

自分が生きるという欲望を満たすために、彼は自分にとって不利益な要素を無視した。エゴイズムの下で、下人は正義感を放棄し、悪を選んだ。

「阿〇正伝」での阿〇は愚昧な人間である。彼は社会の下層に生活し、ほぼ誰でも軽蔑で

きる存在である。しかし、字さえ知らない彼は高い自尊心を持っている。彼は大層己惚れが強く、未荘の人などはてんで彼の眼中になかった。実際に地位でも、金銭でも、阿Qは他人を勝るところが一切なかった。彼は事実の前に目を背き、自分にとって有利の面だけ見た。自己を欺瞞するという方法で自分の自尊心を守っている。

また、彼は未荘の人々と同じように強者に屈服し、弱者に横暴した。阿Qは精神上で誰でも見下げ、自分だけが偉いと思った。しかし、実際に趙だんの前に自分を弁護することさえできなかった。いじめられた時、阿Qはいつも相手を見積り、口べたなやつなら罵倒するし、弱そうなやつならつかかかっていった。屈辱を受けた後、阿Qは若い尼を出くわした。最初は若い尼をいじめたのはその屈辱を晴らすためであった。しかし、周りの人に注目をもらえることを気付いた後、阿Qの動作はさつきよりひどくなった。中国では尼は男性と無縁な存在であるが、阿Qはあえて言葉でからかい、撫でた。彼は自分より弱い人への屈辱により、自分の存在感を確かめる。阿Qは常に人目を気にし、他人の注目を求めてほしい。彼にとって、人に対する評価や判断を社会の位置の上下に基づいてしか考えられなかった。弱者をいじめることで、自分の「高い立場」を保っている。

ほかに、阿Qはいつもつまらないことにこだわり、その勝利で自分の自尊心を維持している。例えば、城内の腰かけの呼び方、たいのから揚げに入れた葱の形、口頭上の言葉、身体から取られる虱の数と嘔み潰す響の大きさなどがある。中に矛盾するところが多く、特に未荘と城内に対する態度である。彼は未荘に対しても城内に対しても、同じく見上げると同時に見下げたということに見下げた。完全に異なる二つのものに対し、同じく見上げると同時に見下げたということ。未荘の人々はいつも阿Qをいじめていた。阿Qは反抗したが、結局自分がやられてしまうことが多かった。その時、子供が父親を打ったり、自分を軽蔑できる第一の人間だったり、自分の面を打ち、自分が人を打っているような気持ちになったりするように思った。阿Qは「精神的勝利法」を通じ、形式上での失敗を精神上の勝利に変え、自己を欺瞞し、慰安し、ごまかしている。

封建社会に生きている阿Qは強い奴隷性を持っている。彼は教育を受けたことがなく、辛い現実に対し、何も考えずに毎日を過ごしている。また彼は自分のものの見方がなかったが、生活している環境から知らないうちいろいろな身についた。例えば、「但他有一种不知从那里来的意见，以为革命党便是造反，造反便是与他为难，所以一向是深恶而痛绝之的」（だが彼は、革命党というのは謀反だ、謀反は自分に工合の悪いものだ、という意見を、なんでそうなったかわからぬがいだいていて、従ってこれまでも「深刻に憎悪」して来ている）。「革命」の目的は国民が平等であり、誰でも幸せに生活できる社会を作ることである。詳しく言うと、封建社会から民衆を解放し、貴族や官僚から権利や土地、金銭を奪い、圧迫された農民に返すことである。阿Qはその中の一人として、革命党の存在はありがたいことはずである。しかし、阿Qはそう思わなかった。阿Qは識字できなく、「革命」の実際の意味がわからなく、「革命」への理解は周りの人々からもらったものである。その時代に下層社会

に生活している人々は自我の存在が知らず、自分の利益を守る意識がなく、ただ言われるどおりに動いた。彼たちは自分の思想がなく、略奪されても、圧迫されても、反抗する意識がなく、ただ受け入れた。革命党は彼たちを搾取される立場から解放させたいが、長年に封建社会に支配されていた彼たちの精神も完全に麻痺され、封建社会の奴隷になった。革命は封建社会を反抗し、彼たちを解放する行動である。しかし、彼たちにとって封建社会に反対するのは自分の利益に危害を加えると同然である。彼らは封建制度の被害者であり、封建制度に捻り曲げられた封建思想に縛られた無知の人間である。封建制度の害毒で人間の本来のもの、人間の本来の姿までも失われていた。害毒を受けていながら痛みさえも知らなかった彼らの姿から彼らの受けた毒がどんなに深いかが窺える。

阿Qはもともと周りの影響で革命党を憎んでいた。城内から戻った阿Qは自分の見識の高さを他人にひけらかすために、革命党を殺す場面を言った。彼は「すごい」と評価しながら、他人を脅かした。目の前に命が奪われたことをただ「すごい」と感じたのは、麻痺された人たちはもう命の尊さを忘れてしまった。しかし、この後、百里四方にその名を知られた挙人だんなさえ革命党を恐れることを聞いた阿Qは思わず革命党に憧れた。この時の阿Qにとって革命はただ自分が注目される手段である。仕事が失い、生活を苦しんでいた阿Qは生きるために城内に行った。帰った時、金持ちになった阿Qは周りの人々の畏敬をもらえた。この時の阿Qは、未荘の人の眼の中で、趙だんななどいたいと同じくらい偉さに思われていた。阿Qは思わず自慢になり、趙だんなの前でも不真面目になった。しかし、彼の経験がばれたら、村の人はまた彼を見下げた。彼は一刻も早く今の状況から抜け出たく、この前のように他人の注目を浴びたいので、「革命党」と名乗り始めた。すべて阿Qが望んだとおり、未荘の人は皆恐懼の眼付で彼を見た。どんな眼付だったかと関係なく、今まで見たことがなかった眼付をもらえただけで、阿Qにとっては喜んだことである。趙だんなも彼の前に卑下していた。「革命党」と名乗った時から、阿Qは未荘の人より立場が高いと思いついていた。

阿Qは趙だんなや閑人たちなどに文句がないわけではなかった。自分の気分を晴らすことも「革命党」になりたい理由の一つである。彼は「欺軟怕硬」の人たちに憎んでいた。しかし、彼が「高い立場」にいる時も、彼たちと同じく「欺軟怕硬」になった。彼は自分の不満を表せる方法はいじめしか考えなかった、

阿Qは「革命」に高い期待に寄せた。しかし、現実では「他近来很容易闹脾气了；其实他的生活，倒也并不比造反之前反艰难，人见他客气，店铺也不说要现钱。而阿Q总觉得自己太失意……既然革了命，不应该只是这样的」（このごろ、彼はおこりっぽくなっている。実際は、彼の生活は、謀叛の前にくらべて決して悪くはなく、人も彼に一目置いているし、商店も現金をよこせなどと言わなかったのだが。だが阿Qは、それにしても得意になれなかったいやしくも革命したからには、こんなことであってはならない）。阿Qの想像では、「革命」すると、より良い生活を必ず暮らせると信じていた。しかし、現実には革命する前後の生活は彼にとって同じである。彼は納得できなかった。阿Qにとって革命の意味は立場の上昇と生活の改善だけであり、この二つがないと、彼にとっては「革命」は無意味である。運び出

された品物は自分の分け前はないだけで、にせ毛唐を憎み、「革命」は謀叛だと言い張った。阿Qにとって「革命」から利益をもらえば、いいものである。利益をもらえなければ、悪いものだ。

阿Qは下層社会に生活している庶民であり、いつもいじめられていた。彼は自己を欺瞞し、現実から目を背け、自分にとって有利な面だけ見て、自分の精神世界を保っている。弱い人をいじめ、自分の自尊心を守り、強い人を恐れ、殴打から免れられた。最初阿Qは「革命党」を憎んだ理由は「革命党」が封建社会に反対する組織である。封建社会の擁護者である阿Qは自分の利益の損害を恐れるので、「革命党」に好意を持っていなかった。「革命党」が自分に利益をもたらせることを知り、また「革命党」を憧れた。「革命党」になれずに、利益をもらえなかった阿Qは「革命党」を恨んでいた。阿Qの革命への態度は完全に自分の利益の有無次第である。自分にとって都合がいいことだけを選んだのは阿Qのエゴイズムである。

下人も阿Qも苦境に向かう時、いつも自分にとって不利の面を無視し、有利の面だけ選んだ。彼らは生きるために、エゴイズムを暴いた。しかし、二人の間に差がある。生きるために、盗人になるしかないことが分かった下人が、論理から抜け出せなかった。彼は論理と生存の間に迷い、老婆から「勇氣」をもらったことで、やっと決着した。阿Qはそうではなかった。彼は行動する前に何も考えなかった。彼は自分の思想が持たなく、何をしても、自分の利益を基準にしている。

第七節 下人の自己覚醒と阿Qの革命

羅生門の下にいた時、下人は盗人になることを抵抗した。しかし、老婆と出会い、老婆の言い訳を聞いた下人は積極的に盗人になった。

下人が老婆の言い訳を聞いたが、「冷然として」「右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面炮を気に」していた。老婆の言い訳の欠点と下人の反応から見ると、下人は老婆の言い訳を聞きながら、何かを考えていたのだろう。彼は老婆に共感できず、嘲るような声で老婆の着物を剥ぎとり、老婆を蹴倒した。その時、下人はわざわざ老婆に「では、己が引剥をしよう」と恨むまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ」と言った。実は下人と老婆の間に越えられない力の差が存在し、簡単に老婆の着物を剥ぎとったので、下人はその話を言う必要がなかった。下人はわざわざその皮肉な話を言い、動作と合わせ、まさに老婆の言い訳を利用し、老婆へ罰を与えた。老婆はこの前に生きるために悪いことをしても、仕方がないと主張した。今の下人はそうした。また、女は生きるために悪いことをし、今わしは女と同じ状況なので、彼女はきつとわしを許してくれると老婆が言った。今の下人も老婆と同じ状況なので、彼は老婆に悪いことをしても、老婆はきつと下人を許せる。つまり、下人は老婆が主張するように行動した。しかし、今度、立場が逆転し、老婆は加害者から被害者に変えられた。

老婆は自分を見過ごすために、下人に自分を正当化するようにした。その代わり、下人は老婆にも嘘をついた。下人は「己もそうしなければ、餓死をする体なのだ」と言ったが、彼

はまだ目の前に餓死の危機が迫っていなかった。そもそも「餓死寸前」の状況はとても曖昧である。厳密に言うと、余力が残らず、死を待つしかない状況である。悪事をする余裕を持っている老婆と下人はその状況ではなかった。強いて言えば、老婆の方が「餓死寸前」の状況に近い。

また下人は老婆の着物を剥ぎとり、老婆を蹴倒した。しかし、下人はかつらにする髪の毛を放棄した。彼は忘れるわけがない。彼と老婆との会話の内容はほとんど女の髪の毛を中心にしていた。また価値があるから、老婆はわざわざ取りに行った。老婆の着物を取った上で、髪の毛を忘れるのはありえない。死者の死骸を尊重したと仮定しても、筋に合わない。生者さえ手を出した下人は、死者を尊敬する必要もなくなった。老婆の着物を剥ぎとったのは、下人は盗人になった象徴であるが、完全に悪人になるわけではない。彼は確かに老婆から「勇気」をもらえた。しかし、この「勇気」はあくまで本心ではなく、ただ生きるために、自分を騙した手段である。表面で下人は着物を剥ぎとり老婆を蹴倒し、老婆に罰を与え、生きる権利を奪ったが、内面でかつらを残し、老婆に生き残った希望を与えた。

老婆は完全な悪人ではない。棲の内には、いつかの死骸が捨てられた。しかし、老婆は「その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた」。老婆は誰でも対象を取るのではなく、きちんと目標を持ち、行動した。もし老婆が言ったことは真実であり、彼女は蛇を干魚に偽り、売ったら、悪事をする人に罰を与えた老婆の行動は完全に悪事ではない。老婆は完全に悪事ではない可能性がある。そのゆえ、下人は老婆に生き残った希望を残した。

下人は苦境の前に、あえて他人の言い訳を利用し、自己覚醒を果たした。しかし、この覚醒は完全な覚醒ではなく、ただ生きるための手段である。

「阿Q正伝」で阿Qは上層社会の人々に文句がないわけではない。しかし、封建社会で強い等級思想があるので、階級の低い人は階級の高い人に反抗できない。だから、その社会背景の影響で、阿Qは不満があっても、反抗するどころか、革命を憎んでいた。しかし、人々が革命を恐れる様子を見た阿Qは革命の威力を感じ、革命に参加しようと決意した。阿Qが革命に参加したい原因は革命思想と関係なく、ただ自分の欲望を満たしたいだけに過ぎない。

封建社会の制度下で生まれ育った阿Qの考えは、すでに旧思想に東縛されていた。彼は下層社会に属し、いつも上層社会の抑圧を受け、不満を持って、反抗できなかった。彼は反抗を持っていたが、その時代背景の下で反抗できない。彼は人間の不平等に目を覚めるはずがない。「革命」の出現は阿Qに支配者になりえる機会を与えた。理由はともかく、社会の下層に置かれる阿Qは上層社会からの圧力に反抗しようとするのは阿Qの革命精神の芽生えとも言えるだろう。

しかし、この時、麻痺した阿Qは封建社会の恐怖と革命の思想がまだわからない。彼はただ反抗の意志を持ち、彼を導ける人物がいらない。彼は冤罪を被られても、自分の理解する範囲を超える時に、彼はいつも以下のように思った。

他以为人生天地之间，大约本来有时要抓进抓出，有时要在纸上画圆圈的。

（人間として生まれた以上、たまには欄へぶち込まれることもあるだろうし、たまには紙にマルも書かせられよう…と彼は考えた。）

他意思之间，似乎觉得人生天地间，大约本来有时也未必要杀头的。

（彼の意識の底では、人間と生まれたからには、ときには首をちょん斬られることもないわけではあるまい、という感じがぼんやりしていた。）

他不过便以为人生天地间，大约本来有时也未必要游街要示众罢了。

（人間と生まれたからには、ときには引きまわしにあうこともないわけではない、と彼は考えたにちがいないから。）

阿Qは自分が理解できないことに対し、いつも「天理」で自分に説得した。冤罪に対しても死亡に対しても平気で受け止めた。人権が奪われたまま、今まで生きた阿Qは殺される前に、喝采する人を見た時に、やっと覚醒した。

这刹那中，他的思想又仿佛旋风似的在脑里一回旋了。四年之前，他曾在山脚下遇见一只饿狼，永是不近不远的跟定他，要吃他的肉。他那时吓得几乎要死，幸而手里有一柄斫柴刀，才得仗这壮了胆，支持到未庄；可是永远记得那狼眼睛，又凶又怯，闪闪的像两颗鬼火，似乎远远的来穿透了他的皮肉。而这回他又看见从来没有见过的更可怕的眼睛了，又钝又锋利，不但已经咀嚼了他的话，并且还要咀嚼他皮肉以外的东西，永是不近不远的跟他走。

这些眼睛们似乎连成一气，已经在那里咬他的灵魂。

（その刹那、彼の思考は再び旋風のように頭のなかを駆けめぐるような気がした。四年前、彼は山のふもとで、一匹の飢えたおおかみに出あったことがある。おおかみは、近づきもせず、遠のきもせず、いつまでも彼のあとをつけて、彼の肉を食おうととかかった。彼は、恐ろしさに生きた空もなかった。さいわい、鉦を一丁手にしていたので、そのおかげで胆をしずめて、どうにか未荘までたどりつくことができた。しかし、そのときのおおかみの目は、永久に忘れられない。残忍な、それでいて、びくびくした、さらに鬼火のように光る目、それは、はるか遠くから、彼の皮肉を突き刺すような気がしたものであった。ところが、こんどというこんど、これまで見たこともない、もっと恐ろしい目を、彼は見たのである。にぶい、それでいて、棘のある目。とうに彼の言葉を噛み砕いてしまったくせに、さらに彼の皮肉以外のものまでかみ砕こうとするかのよう、近づきもせず、遠のきもせずに、いつまでも彼のあとをつけてくるのだ。それらの目どもは、スーッと、ひとつに合わさったかと思うと、いきなり彼の魂にかみついた。）

昔の阿Qは革命党を殺す場面を見た。その時の彼は喝采する人と同じような気分であっ

た。今、彼は革命党に成りすまされ、反対側の視点で昔の自分を見ることができた。封建社会は彼の人権を奪い、労働成果を搾取し、さらに彼の精神まで併呑しようとする。上層社会はいつでも、どこまでも下層社会を狙い、最後まで彼たちの価値を手に入れようとする。彼はこの時に封建社会の恐怖を知り、目を覚ました。

下人も阿Qも最後で自己覚醒した。しかし、二人の姿勢は反対である。下人は生きるために、積極的に自己覚醒を果たしたが、阿Qは殺される前に、厳しい現実と向き合わざるをえない時、感覚で初めて目を覚ました。

第八節 下人の未来と阿Qの死亡

「羅生門」の結末では下人は老婆の着物を剥ぎとり、蹴倒し、夜の底へかけ下りたとある。

「下人の行方は、誰も知らない」が、コンテクストにより、下人がこれから盗人になることが推測できる。

「羅生門」の主題について、吉田精一氏は『芥川龍之介』で以下のように述べた。

この下人の心理の推移を主題とし、あわせて生きんが為に、各人各様に待たざるを得ぬエゴイズムをあばいているものである。：善にも悪にも徹し得ない不安定な人間の姿をそこに見た。(注35)

駒沢喜美氏は先の吉田精一氏の論理について、以下のように述べた。

「善にも悪にも徹し得ない不安定な人間の姿」を見ているのではなく、善と悪を同時に併存させているところの矛盾体である人間そのものを、さしだしていると思うのだ。(注36)

吉田精一氏と駒沢喜美氏は下人の性格は善と悪と両方を持っていると考えている。下人は確かに不安定な人間であり、彼の身に善と悪を同時に持っている。彼は門の下にいた時、生きるために盗人になるほかに方法がないと分かっていたが、なかなか決断できなかった。この時の下人の心に悪が完全にないわけでもないが、善の方が圧倒的な力を持っている。老婆と出会った後、潜んでいた悪が優勢になった。しかし、この時の善は完全に消えるわけではない。下人の心は善と悪と同時に持っているが、状況によって割合が変化している。

老婆と出会う前に下人はこれからの生活に悩んでいた。彼はいつも「面炮」を気にしていた。しかし、老婆と出会い、彼は「面炮」から手を離れた。つまり、老婆から悪人になる「勇氣」をもらった下人はもう善に拘泥する必要がなくなった。しかし、彼は完全に悪人になるのではない。

また、結末の「まだ燃えている火の光」について、悉知由紀夫氏は以下のように述べた。

『羅生門』の結末部では、松明の火は「まだ燃えている」と表現されていた。つまり、下人は老婆から着物を奪う段階にいたっても、「まだ悪に対する反感・憎悪の心を残している」と解釈することができるのではないか。もちろん、下人は盗人になる勇気を得て、老婆から着物を奪い走り去ったことは事実である。「夜の底」と「黒洞々たる夜」という言葉に下人の「暗黒に彩られた未来」が暗示されていると読むことも可能だろう。しかし、下人は「悪に対する反感」がまだ残っているのならば、その暗黒の未来とは、単純に「盗人としての生き方」を指すのではなく、「悪を憎む心を残したまま、盗人として生きていかなければならないことへの苦悩」、言い換えれば、「自分を正当化できないまま、悪事を重ね続けることへの苦悩」を暗示していると考えられることもできよう。つまり、「夜の底」と「黒洞々たる夜」という言葉は、盗人として生きるという行為だけではなく、そのようにして生きていかざるを得ない、「苦悩と葛藤に満ちた下人の心」の象徴でもあるということである。

：「下人の行方は、誰も知らない」という一文に、「夜の底」・「黒洞々たる夜」という言葉を重ね合わせ、下人の盗人としての暗黒の未来を読むことは妥当ではある。しかし、下人にまだ悪を憎む心が残されているならば、下人の行方には一縷の希望も残されている。(注37)

下人は苦境の前に、あえて他人の言い訳を利用し、自己覚醒を果たした。しかし、この覚醒は完全な覚醒ではなく、ただ目の前の苦境を脱出する手段である。彼は盗人になったが、心の中に「善」の部分はまだ残っている。

「阿Q正伝」の第九章「大団円」では、阿Qは趙家の略奪事件の犯人として処刑された。革命党はもともと下層社会にいる庶民を封建社会から助けていた存在である。しかし、実際に権利を握ったのは上層社会の者である。革命の旗を掲げたが、権利は旧支配層から新支配層へ移行しただけである。ただ名前を変えただけ、下層の者にとって依然として無縁なものである。阿Qへの尋問もただ見せかけであり、判決は真実と関係なく、すべて権力によって下されたものである。上位者は自分の略奪行為を阿Qに濡れ衣を着させ、急いで阿Qを処刑した。上層の者は正義の名を被り、悪いことをしたが、自分の功績を示すために、無実の人に罪をなすりつけた。

阿Qはもともと上位者に不満を持っていたが、封建社会の影響で反抗できなかった。革命党の威力を知った阿Qは初めて封建社会に対する反抗の傾向が窺える。しかし、この時の阿Qの動機は自分の欲望を満たすだけであり、封建社会の怖さをまだ認識していなかった。彼は殺される前に、喝采する人を見た時、四年前のことを思い出した。この時の阿Qは、封建社会は飢えた狼のように、いつまでも遠からず近からず彼の皮や肉だけではなく、靈魂さえ噛み砕こうとすることを認識した。これらの民衆は他人でもあり、昔の自分でもある。しかし、今まで彼は一度も自分を見直せなかった。封建社会の影響で彼らはすでに思考する能力も失い、完全に封建社会の奴隷になった。今の段階で阿Qはきちんともう一度見直し、封建

社会の恐怖を理解した時、目が覚めた。だから、彼は最後に「助けてくれ」と叫ぼうとした。しかし、言えなかった。

冉秀氏は『阿Qの精神構造…「賢人、馬鹿、奴隸」との関連において』で以下のように述べた。

阿Qは処刑される時に、見物の群衆の目を見て、初めて「恐ろしい」という感じがした。今まで阿Qはただ自分の仮想の、自尊心(プライド)が高い世界に生きていたので、現実の自分の低い身分や劣勢状態を正視せず、自己を欺瞞する「奴隸」的世界に安住していた。そのため、現実の普通の人間としての「恐ろしい」感じが全然しなかった。

しかし、今度という今度、彼は群衆の目から今までの自分の生き方を顧みることができ、今までの自分の、「奴隸」の身分、自己を欺瞞する自尊心(プライド)、自分の「馬鹿」的行動をもとに正視するようになった。その時、阿Qは初めて、これまでの自分の「奴隸」の身分、自己を欺瞞する世界から抜け出したという気持ちになった。だから、「助けてくれ」という叫び声を出そうとした。この声が阿Qの自己覚醒の萌芽であると読み取れる。つまり、「奴隸」的性格、自尊心(プライド)が高い性格、「馬鹿」的な性格を一身に集めている阿Qは、その瞬間に本心で当時の厳しい現実と向き合いはじめ、戦う気持ちになったからこそ、「助けてくれ」と叫ぼうとした。阿Qはすぐに死ぬが、しかし彼の最後の叫び出そうとする行為は当時の中国の「奴隸」的生活をしている民衆をも救おうとする、最後の救いの叫び声の行為であると言える。当時深い危機に陥っていた中国を救済する最後の叫び声、最後の希望の叫び声といっても過言ではない。(注38)

「阿Q正伝」の結末で、最も大きな影響を受けたのは拳人だんなの盗られた物を取返さないことと趙秀才の辮子を切られた上、二十貫の懸賞金を損じたことである。阿Qの死に対し、城内の人にとってはかんばしくなかっただけである。そして、城内の人が気になり、阿Qがよく歌っていたのは紹興地方の芝居「龍虎闘」(竜虎のたたかい)中の歌である。

“ 得得，锵锵！”

悔不该，酒醉错斩了郑贤弟，

悔不该，呀呀呀……

得得，锵锵，得，锵令锵！

我手执钢鞭将你打……”

(「タツ、タツ、チャン、チャン！」)

悔ゆとも詮なし、酔うて見まがい、あやめたるは鄭賢弟。

悔ゆとも詮なし、ああ、ああ、ああ……

タツ、タツ、チャン、チャン、タツ、チャン、リン、チャン！

鉄の鞭をば振りあげて……」

「龍虎闘」の内容は宋の初代皇帝趙匡胤と呼延賛との交戦である。阿〇が歌っていたのは第十四場での趙匡胤の「酔うて見まがい、あやめたるは鄭賢弟」と呼延賛の「鉄の鞭をば振りあげて」である。趙匡胤の「酔うて錯り斬る鄭賢弟」は彼の後悔の気持ちを表しているが、阿〇はこれを用い、人生で一番楽しい気持ちを表した。実は「酔うて見まがい、あやめたるは鄭賢弟」の後ろにもう一句があるが、阿〇はこれを忘れ、「ああ、ああ、ああ……」とごまかした。「謀反だ、謀反だ」と叫ぶだけで革命党になれると思った阿〇は「鉄の鞭をば振りあげて」で自分の権利を周りの人に示したのである。彼は歌の意味を知らず、ただ恰好がいいと思うだけで歌った。物語の最後に阿〇が死ぬ前に歌ってほしいと思っていた城内の人は愚かなものである。彼らは恐らく歌の内容を気にせず、ただその行動に興味を持っていく。二十年目にはうまれかわって男一匹……」という悲壮な言葉にも称賛をする城内の人々は、「龍虎闘」の内容を理解できる人もいないだろう。物語の最後になっても、覚醒する人が一人もいなかったことが描かれている。

第三章 「鼻」と「阿〇正伝」の比較研究

第一節 禅智内供の「鼻」と阿〇の「癩疮疤」

「鼻」の冒頭部では「禅智内供の鼻と云えば、池の尾で知らない者はない」と書かれた。有名なのは、禅智内供という人物ではなく、その変な形の鼻である。内供が鼻になっただけの理由には二つある。一つは鼻が長いので、日常生活では不便だった。しかし、彼が最も気になっていたのは日常生活で起こった小さいことだけであつたが、鼻のせいで、京都まで喧伝された。自尊心が高い内供にとって、何とかしなければならぬ。

内供は、五十歳を越えた。普通この年齢になると、自分の外見などをあまり気にせずに暮らすはずである。しかし、沙弥の昔から、内道場供奉の職に陞った今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んでいた。内供になっても、よく人に笑われていた。恐らく小さい頃から、この鼻のせいで、よく周りの人たちからかわれていた。この鼻の存在は彼の心中の悩みになった。昔は地位が低いので、鼻の問題を解決しようとしても、なかなかできないだろう。しかし、内供になり、自分の力で解決できるはずである。しかし、僧侶の身なので、とても気になっても、表面ではさほど気にならないような顔をしていた。普通僧侶は本来の浄土を渴仰すべき存在であり、仏道を専念し、余計なことを無視すべきだ。内供自身はこの点をきちんと分かったが、無視できない。しかし、もっとも重要なのは、自分が鼻を気にしていることを、人に知られるのが嫌であることである。つまり、自尊心が高い内供は他人の目をもとても気にし、自分の弱点を他人の前で隠そうとした。

内供は一方で自分の鼻を一層気にし、日常の談話の中に、鼻という語が出てくるのを何よりも恐れていた。その一方で、僧侶として、鼻の心配をするのが悪いことをよくわかってきた。つまり、内供は矛盾した心理を持っている。

内供の自尊心は余りにデリケートであり、池の尾の町の者はよく彼の鼻をからかっていた。実際の評価について、内供は何とかなできないので、精神上で積極的にも消極的にも、自尊心の毀損を回復しようと試みた。

消極的な回復方法の一つは長い鼻を実際以上に短く見せる方法である。人がいない時に、内供は鏡へ向かい、角度を探り出したり、動作を合わせたりしていた。しかし、自分が満足できるほど、鼻が短く見えたことは、一度もなかった。時に苦心すればするほど、かえって長く見えるような気さえした。この方法をうまくできないので、内供は諦めた。もう一つは自分と同じような鼻のある人物を見出す方法である。寺の中で探したが、同じような鼻は一つも見当らなかった。最後に自分の気持ちを晴らすために、内供は内典外典の中に、自分と同じような鼻のある人物を見出し始めた。しかし、自分と同じような長い鼻を持つ者は一人もいなかった。

積極的な回復方法は鼻の短くなる方法を試みたことである。内供はこの方面でもほとんどできるだけのことをしたが、鼻は依然として変化がなかった。

内供は自分の鼻をとても気にしている。しかし、どんな方法を試しても、なかなか解決で

きなかった。強い自尊心を持っている内供は、実際にこの鼻に対し、強い自己嫌悪を持っている。この鼻は彼の弱みであり、これが存在する限り、いつまでも他人からかわられる対象になる。だから、一刻も早くこの問題を解決しようとした。しかし、うまくできず、彼はまた落ち込んでいた。

また、内供は孤独である。外に対し彼は僧侶であり、仏教の戒律を守らなければならない。内に対し、僧の前に、彼は内供であり、威厳を維持しなければならない。ましてや、彼は自尊心が高いので、人の前に自分の悩みを話すのはありえない。彼は自分と同じような鼻のある人物を見出そうとするのは、実際に同じ悩みを持つ相手を求め、自分を癒すためである。彼の悩みは他人に共感できないものなので、同じ悩みを持たなければ、理解できない。もし誰かが自分と同じ悩みを持てば、彼は一人ではない。しかし、このような人はどこでもない。結局彼は一人である。

阿Qも同じくよく自分の「癩疮疤」(おできのためにはげていること)を気になっている。体の欠点が彼にとっては、唯一の欠点ともいえる。その故、「他讳说“癩”以及一切近于“赖”的音,后来推而广之,“光”也讳,“亮”也讳,再后来,连“灯”“烛”都讳了」(彼は「はげ」という言葉、および一切の「はげ」に近い発音がきらいであった。後になると、それがしだいにひろがって、「光る」も禁物、「明るい」も禁物になった。さらに後になると「ランプ」や「ろうそく」まで禁物になった)。未荘の閑人達は彼の「弱点」を知り、いつも彼をからかっている。

禅智内供も阿Qも自尊心が高いが、同じく体の欠点を持っている。彼らは必死に自分の弱みを隠そうとした。しかし、周りの人からよくからかわれていた。違ったのは、内供は僧侶なので、自分の立場に束縛され、表面では気にならないようなふりをしていた。阿Qは相対的にわがままであり、「はげ」に関係を持つ言葉を一切話せない。誰かが故意で言ったら、阿Qは怒り出し、喧嘩した。内供は自分の悩みを解決するために、裏でいろんな方法を試みた。鼻を実際に短くするだけでなく、精神上にも鼻を短く見せるために工夫した。阿Qは自分の「癩疮疤」に解決する気もなく、精神上にも鼻を短く見せるために工夫した。阿Qは自分として、他人にやられてしまうほうが多かった。そこで彼は方針を変え、多くの場合は睨みつけることにした。どうしても晴らせない場合は、「精神的勝利法」を利用し、自分を説得する。悩みを解決するために、内供は自分が知っている範囲でなんでもチャレンジした。阿Qは解決する気がなく、ただ他人に話せなく、いつも自分にとって都合がいい方法を選んでいった。また、内供も阿Qもいつも一人ぼっちだが、内供は精神的に自分と同じ悩みを持つ相手を探そうとし、自分を癒したいが、阿Qがその意識がなく、誰が軽蔑した。

第二節 傍観者の利己主義

「鼻」では登場人物は禅智内供以外に、池の尾の町の者、僧、侍がいる。この三種類の人 は全部「傍観者」である。禅智内供はいつも気にしている他人の目は具体的に言うと、この三者である。この中で、池の尾の町の者、僧がよく出てくる。

池の尾の町の者はいつも禅智内供の鼻について話している。中には確かに「あの鼻だから出家したのだろうと批評する者さえあった」が、ほとんどの「池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禅智内供のために」理由を付けた。彼らはもともと禅智内供の鼻を嘲笑うつもりがなく、かえって内供を同情していた。しかし、自尊心が高い禅智内供は強いプレッシャーを感じていた。内供は宮中の内道場に奉仕した高僧として、普段は人々に尊崇される人物である。この変な形の鼻の原因で、彼は普通人の人に同情されてしまった。「同情」は「他人の気持、特に苦悩を、自分のことのように親身になって共に感じることを指すが、本質的に自分より他人の方が劣勢に立っている。池の尾の町の者は禅智内供を嘲笑っていないが、内供を同情するとともに、普通の自分を喜んでいいる。彼らは禅智内供のような偉い人ではなく、変な形の鼻も持っていない、距離を持っているので、池の尾の町の者にとって、禅智内供は「他人」であり、「自分」ではない。だから、内供は孤独を感じた。

僧は内供と池の尾の町の者の間に重要な作用を持っている。京都まで喧伝された鼻を粥の中へ落した話は、もともと寺で起こった小さなことなのに、京都まで喧伝されたのは寺の僧が口にしないと広げない。普通で僧侶は当来の浄土を渴仰すべき存在であるが、ここでの僧は全部俗物的なことを気にしている。

僧の中で禅智内供と一番近いのは弟子の僧である。弟子の僧はいつも内供の傍にいて、誰より内供のことを了解した。弟子は内供の悩みを知ったので、京へ上り、わざわざ知己の医者から長い鼻を短くする法を勉強した。この時、弟子は内供のために長い鼻を短くする法を学んだのは恐らく自分の師匠の歓心を買うだろう。しかし、内供はいつものように、「鼻などは気にかけないと云う風をして、わざとその法もすぐにやってみようとは云わずにいた」。弟子の僧にも、「内供のこの策略がわからない筈はない」が、この策略が反感より弟子の僧の同情を動かした。この時、地位の低い弟子の僧が自分の師匠の役に立っていることに對し、内心は満足しているだろう。しかし同時に、地位の低い自分が地位の高い師匠に同情や力を与えることに對し、恐らく弟子の僧が内供に同情しているうちに得意になるだろう。弟子の僧は最初に内供のために、この法を試みる事を勧め出した。内供も弟子の僧の親切がわからない訳ではない。内供は喜んでいいるはずだが、実際に不愉快である。自尊心が高い内供は長い鼻を短くするために、弟子の僧のするままに任せて置いたと同時に、「自分の鼻をまるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われた」。だから、他人の助けを受ける時も自尊心も傷つけられる。彼は他人の力によって自分の悩みを解決したいのに、そのまま任せることを嫌がっている。途中で弟子の僧は、時々気の毒そうな顔を聞いたが、内供は腹を立てたような声で答えた。道理が分かったが、自尊心が高い内供はいつも自分の気持ちを制御できない。この矛盾した心理を持っているので、鼻の短くなったことに恨めしくなった時に弟子の僧に怒ったのはおかしくない。弟子の僧も自分の善意が悪意によって返されたことで、不公平を感じ、内供から離れてしまった。

池の尾の町の者と僧は最初変な鼻を持っている内供に同情した。内供が自分の鼻を気になっっていることについて、彼らは知っているかどうか疑問を持っている。少なくとも内供は

普段自分の外見などをあまり気にせずに見せかけ、誰かがわざわざ聞きに来る必要もない。池の尾の町の者と僧は疑っても証拠もない。しかし、鼻が短くなると、誰も内供が自分の鼻を気にしていることを知られた。もともと誰も知らない秘密は動かぬ証拠になってしまう。普通内供は人々に尊崇される職位だったが、変な鼻の関係で、普通の民衆さえ簡単に議論できる対象になる。池の尾の町の者は、「こう云う鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を仕合せだと云った」。つまり、変な鼻がないので、出家する必要もないとも言える。内供を同情するとともに、自分がそのような鼻を持っていないことに幸せと感じた。僧も同じく、内供は自分より地位が高いが、自分がない欠点を持っていると思われる。僧もともと憧れられる存在は不幸に陥り、また再び元の地位に戻そうとすることに、ギャツプを感じるのをおかしくない。しかし、実際はそうではない。

人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこっちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、同じな不幸に陥れて見たいような気にさえなる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。

最初、人々は変な鼻がある内供を同情していた。これは身体上の欠点に対するものである。内供の鼻が短くなると、人々が嘲笑うのは彼の心である。普通の僧侶さえ仏道を専念することを要求され、彼は人々に尊崇される高僧としてさらに要求される。しかし、僧侶の代表としての内供は基本のことさえできない。こんなことが露見したら、自尊心が高い内供は前より傷つけられる。

池の尾の町の者と僧は最初内供を同情したが、内供の鼻が短くなった後、前よりつけつけと嘲笑うようになった。この変化は内供も感じていた。侍は最初に内供を同情しなかった。ただ「前よりも一層可笑そうな顔をして、話も碌々せずに、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である」。侍は身分が高く、僧俗のように考慮する必要がないので、直接に内供の前に表した。この時から、内供は微か傍観者の利己主義を感じた。

内供はずっと自分の鼻を悩んでいた。解決するためにいかなる方法も試みたが、なかなか解決できなかった。彼は鼻を短くなると、誰も彼を笑っていないと信じていた。しかし、鼻の問題を解決し、満足している時に他人の態度の変化を気付いた。そのギャツプを感じた内供は昔の長い鼻を憧れた。

「阿Q正伝」でも傍観者の利己主義が存在する。それは他人の不幸を楽しみ、また宣伝することである。阿Qは呉媽に求愛した後、「この日から、未莊の女たちが急にはずかしがるように見えた。女たちは、阿Qの姿を見ると、こそこそ門のなかへ隠れてしまふ」。阿Qの恋愛の悲劇はどうやって広がっているか分からなかったが、女たちの態度から阿Qの醜聞が宣伝される程度が窺える。結局阿Qは未莊にいられなくなり、生計にも困った。この後の

泥棒のことも同じである。誰でも阿Qの不幸を楽しんでいる。最後に阿Qは隊長の顔を挽回する道具になり、犠牲された。阿Qが趙だんなに叱られ殴られたことも、最後に濡れ衣を着せられ、処刑されたことも、誰も阿Qが悪いと言った。阿Qも同じである。周りの人の機嫌を取るために若い尼を勝手に弄んだことも、革命党を殺す場面を話したことも、完全に傍観者のふりをした。彼らはいつも他人の苦痛を無視し、傍観者として、都合のいいことだけ気にしている。

「鼻」でも「阿Q正伝」でも傍観者の利己主義が存在する。人はどうして他人の醜聞に興味を持っているか。それは他人の不幸は自分の不幸を軽減できるからである。他人の不幸を聞き、自分は優越感を生まれる。内供の変な鼻と比べ、自分が正常な鼻を持つことから優越感をもたらえる。未荘の閑人たちも阿Qから優越感をもたらえる。

禅智内供も阿Qも自尊心が高く、体の欠点にいつも気にしている。内供は自分の鼻を短くすることに成功したが、その弱みが世間にばれたら、前より激しく笑われた。彼は池の尾の僧俗の態度に、傍観者の利己主義をそれとなく感じた。阿Qも未荘の閑人達は傍観者の利己主義の存在を意識していない。精神が麻痺された彼らは自分の思想がなく、いつも上位者の権利を擁護している。また、「鼻」では傍観者の心には互に矛盾した二つの感情がある。同情する人がその不幸を切り抜ける時に、同じ不幸に陥れ見たいような気にさえなる。「阿Q正伝」ではそのような複雑な気持ちがない。ただ他人の不幸に興味を持っている。

第三節 禅智内供の自己欺瞞と阿Qの精神的勝利法

「鼻」では禅智内供はずっと自分の鼻を悩んでいる。長い鼻がないと、他人に笑われることもないと信じていた。だから治療を受けた内供は、自分の短い鼻を見て、満足した。彼はしばらくの間に楽しかったが、二三日が立ち、意外な事実に気付いた。元の長い鼻には周りの人は笑ったことが分かったが、彼の前で笑ったことは一度もなかった。やっと人並みの鼻になったが、かえって彼の前で露骨に笑われるようになった。また笑う意味も変わった。彼はその変化について本当の理由が分からなかったが、なんとなく傍観者の利己主義を感じた。この点を意識した内供は鼻を短くした行動を後悔し、昔の長い鼻を懐かしんでいた。しかし、傍観者の利己主義はずっと存在し、普段は隠されているが、何があったらすぐ暴露される。これは内供が意識してもしなくても変わらぬ。この点を悟った内供は日毎に機嫌が悪くなった。昔は表面に、気にならないような顔をしたが、今は誰でも意地悪く叱りつけた。昔鼻を短くする方法がなくても、一度も諦めなかったが、今は何もしないままで諦めた。恐らく内供自身も他人の利己主義を無くす方法がないことが分かったので、仕方がなく諦めた。彼は自分の陰鬱な気分を抑えられなく、今誰でも意地悪く叱りつけた。最後に内供に真心を込める人もいなかった。

昔、彼は人々に尊敬される高僧であり、弟子の僧、中童子や下法師も彼を助けた。彼の悩みは長い鼻しかなかった。しかし、彼にとって唯一の悩みを解決し、幸せな未来が待っていたはずが、想定外のことが起こった。鼻の問題どころか、自分の名声も味方も失った。彼は

本当に気にしているのは鼻自体ではなく、他人の目という実体がないものである。いったん他人の目が変化すれば、実体化された鼻の意味も変えられた。昔、池の尾の町の者が笑っていたのは長い鼻であったが、今、皆が笑っていたのは内供の虚栄心である。この点を意識した内供は自分の鼻を短くした行動について後悔した。これについて、笠井秋生氏は以下のように述べた。

芥川はなぜ、〈鼻の短くなつたのが、反て恨めしくなつた〉という〈naturalでない〉心理を内供に抱かせたのだろうか。内供という主人公が周囲の人々の態度に過敏な反応を示し、それに左右されがちな人間であることを強調するためであろう。つまり、芥川はこの作品において、周囲の人々の思惑に極端に神経質である自意識過剰な人間を形象化するために、前半で、〈自尊心の毀損を恢復しよう〉と努める鼻長内供の姿を描き、後半で、〈傍観者の利己主義〉に接して、〈鼻の短くなつたのが、反て恨めしくなつた〉という〈naturalでない〉心理を抱く内供の姿を描いたのである。(注39)

ある夜の翌朝、内供は昔の長い鼻に戻った。「そうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じような、はればれした心もちが、どこからともなく帰って来るのを感じた」。鼻が短くなり、数十年の宿願を果たした時の内供の気持ちは言うまでもなく最高である。しかし、数日の間に、彼の苦しみは数十年の悩みよりひどくなつた。鼻がまた元に戻った時も短くなつた時も同じ感覚になつた。つまり、この時の内供にとつて鼻の長さはどうでもよく、彼は一刻も早く今の状態から脱出し、元の状態に戻りたいと思つていた。傍観者の利己主義を感じた内供は、もはや他人が気になつてゐるのは彼の鼻ではなく、彼がまた不幸に陥れることを微かに感じた。最初内供の長い鼻に池の尾の町の者は同情していた。内供は鼻を短くし、鼻の不幸から切り抜けようとした時に、池の尾の町の者は彼をまた同じ不幸に陥れたいので、彼に敵意を抱いた。今回、池の尾の町の者が笑つてゐたのは彼の鼻ではなく、彼の虚栄心である。もし内供の虚栄心が露見しなければ、池の尾の町の者は何も言えないかもしれない。明らかになつた以上、鼻を元の長さに戻しても、池の尾の町の者は依然として彼の虚栄心を笑える。池の尾の町の者はただ彼をまた不幸に陥れることを見たく、本当の理由は誰も気にしなかつた。しかし、その理由も分かつた内供は元の通り長くなつた鼻に対し、「こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいない」と自分に言つた。鼻は元の形に戻しても、現実の状況は元に戻らない。内供は鼻が戻れば、皆の態度も前と同じだと自分を説得し、その言葉はまさに自己欺瞞である。彼は自己を欺瞞し、現実から目を反らした。実は変な形を持つてゐるのは彼の鼻ではなく、心である。内供は自分の弱みを克服しない限り、他人の目はいつでも彼を傷つける。

「阿Q正伝」で阿Qは高い自尊心を持つてゐる。「本来なら『完璧な人物』と称して差しつかえないほどであるが、惜しいことに、彼には体質上に若干の欠点があつた」。それは「癩

疮疤」(おできのためにはげていること)である。彼は自分の「癩疮疤」を結構気にしている。ので、関連する言葉さえ彼にとって禁物になった。他人が禁を犯せないことは阿〇の現実から目を背くやり方である。自尊心が高い彼は自分の欠点を正視できず、禁物によって自分の恥をかかない。しかし、彼の行動は彼の内心の劣等感を暴露した。彼は他人のいじめにも反抗したが、自分がやられてしまうことが多かった。彼は現実で屈辱的なことに遭った時、その出来事に対し異なる意味づけをすることで、精神上の勝利に変え、自分の自尊心を保っている。

禅智内供も阿〇も自尊心が高いながら、いつも他人の目に気にし、自分の意識を持っていない。彼らは現実に不満を持ち、自分の努力で現状を変えたいが、いつも生き詰まっている。禅智内供も阿〇も自尊心が高く、目の前の惨めな境遇を直視することができず、現実から逃避し、自分で拵えた架空の世界に入り込んでいた。しかし、両者の間に違うところもある。内供は自分の鼻を気にしていることが他人に知られたくないが、阿〇は自分の「癩疮疤」を気にしていることが未荘の閑人達に知られている。内供はその残酷な事実を微かに感じたが、認めたくない。ので、敢えて自分を欺瞞した。一方、阿〇の方はいつもいじめられ、生きるために、習慣になるほど無意識に自分の自尊心を守るだけである。

終章 芥川龍之介と魯迅の作風の共通点と相違点

以上の分析により、芥川龍之介の「羅生門」「鼻」と魯迅の「阿Q正伝」の内容について多数の共通点が存在することが明らかに。「羅生門」と「阿Q正伝」での主人公は名前さえ明らかにされず、社会の底辺に生活している人物である。彼らは体の欠点があり、世間のルールに縛られ、生きるために悩み、あがき、最後に外部からの影響の下で自己覚醒し、暗い未来に進んでいく。「鼻」と「阿Q正伝」での主人公は自尊心が高いが、体に欠点がある。彼らは現実の惨めな境遇を直視できず、敢えて自分を欺瞞した。

また、内容の表面上の相似だけでなく、作品の深層部に関わる主人公の人間像の造形や人間の持つエゴイズム、傍観者の利己主義に顕著である。「羅生門」と「阿Q正伝」では下人も阿Qもエゴイズムを持ち、目の前の困境に対し、自己覚醒した。「鼻」と「阿Q正伝」では傍観者の利己主義が存在するがゆえに、自分の自尊心を守るために、禅智内供も阿Qも自己欺瞞を選んだ。

「羅生門」「鼻」と「阿Q正伝」の三作品では、芥川龍之介と魯迅はエゴイズムという方面から厳しく人間性を暴いた。

まず、エゴイズムを暴くために、芥川も魯迅も登場人物を死亡という特別な極限状態に置いた。下人は主人に暇を出され、羅生門という境界に置かれ、これからの生計に悩んでいた。彼の前には二つの選択肢しかなかった。餓死するか、盗人になるか、悩んでいた。彼は老婆と出会い、自分の善を放棄し、盗人を選んだ。阿Qはずっと人権が奪われている封建社会に生活している。彼はずっと生活に苦しみ、最後に無理やりに革命の犠牲者になった。

次に、主人公は結局エゴイズムを選んだ。下人は最初生きるために盗人になるしかないという事実が分かったが、なかなか決断できなかった。しかし、彼は老婆の言い訳を聞いた後、エゴイズムの下で、下人は正義感を放棄し、悪を選んだ。禅智内供はずっと自分の鼻を気にしているが、表面では気にならないような顔をしていた。長い鼻を短くする方法を試みたいが、自分はずいと言わなかった。治療を受けている時も「信用しない医者の手術を受ける患者のような顔をして」いる。こうすると、内供は自分の鼻を短くさせると同時に、自分の自尊心も守れる。阿Qはいつも強者に屈服し、弱者に横暴に振る舞っている。自分より弱い人へ屈辱を与えることにより、自分の存在感を確保する。また、阿Qはもともと革命党を憎んでいたが、革命が自分に利益をもたらせることを知り、また革命に憧れた。何をしても、いつも自分の利益を基準にしている阿Qは完全な利己主義である。また、下人の盗人への変身も、内供の「こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいない」も、阿Qの精神的勝利法も、厳しい現実を受け入れず、敢えて自己を欺瞞し、自分の内心の世界を守る手段である。

そして、主人公のエゴイズムだけでなく、傍観者の利己主義も存在する。「鼻」と「阿Q正伝」では主人公は自分の苦しみを持っている。彼らの苦しみの中の大半の源は傍観者の利己主義である。内供は確かに内心の弱みがあったが、池の尾の町の者の利己主義を悟る前に、彼もその影響を受けた。傍観者の利己主義を微かに悟った後、彼は前より苦しめられた。阿Qが他人に叱られ殴られたことも、最後に濡れ衣を着せられ、処刑されたことも、誰も阿Qの

不幸を同情することもなかった。傍観者にとって、自分の身に起こったことでない限り、他人の苦痛を簡単に無視できる。

また、「羅生門」「鼻」と「阿Q正伝」の内容は悲劇的である。下人は盗人になり、未来は暗黒である。内供は現実から目を背け、自分を騙した。阿Qは濡れ衣を着せられ、処刑された。

芥川龍之介の「羅生門」「鼻」と魯迅の「阿Q正伝」では内容と人間像の造形が共通するところは多数存在する一方、相違するところも存在する。三作品の字数から見ると、芥川龍之介の「羅生門」「鼻」は短編小説であり、魯迅の「阿Q正伝」は長編小説である。「羅生門」は下人の行動に焦点に置き、羅生門の下で下人から盗人への変身の物語である。「鼻」は鼻を焦点に置き、鼻をめぐり、禅智内供の心理変化が描かれる。「阿Q正伝」は阿Qの行動、遭遇、運命を中心に、阿Qの生い立ちが描かれる。芥川龍之介はある特定の場所に起こったことやあるものを巡り起こったことを中心に、短く内容を絞った。魯迅はそうではなかった。彼はある人物の短い人生を詳しく描いた。主人公だけでなく、ほかの登場人物の人間像も詳細に描いた。

また、芥川龍之介と魯迅の創作動機が違う。「羅生門」の執筆の動機について、芥川本人の言説により、「羅生門」と「鼻」は純粹に芥川の吉田弥生への所謂失恋体験の所産だと考えられる。その恋愛問題の影響で、彼はエゴイズムの存在に気づき、自分の陰鬱を晴らすために、この二つの短篇を書いた。「羅生門」「鼻」は歴史小説である。「羅生門」は『今昔物語集』の本朝世俗部卷二十九「羅城門登上層見死人盗人語第十八」を基に、卷三十一「太刀帯陣売魚姫語第三十一」の内容を一部に交える形で書かれたものである。「鼻」は『今昔物語集』の「池尾禅珍内供鼻語」及び『宇治拾遺物語』の「鼻長き僧の事」を題材としている。芥川龍之介は古典作品から取材したが、古典作品の枠を拘らず、新しい生命を注ぎ込み、現代小説を書いた。これについて、一九二三年六月に出版された『現代日本小説集』「附录 关于作者的说明」において芥川龍之介について魯迅が次のように述べた。

他又多用旧材料，有时近于故事的翻译。但他的复述古事并不专是好奇，还有他的更深的根据：他想从含在这些材料里的古人的生活当中，寻出与自己的心情能够贴切的触著的或物，因此那些古代的故事经他改作之后，都注进新的生命去，便与现代人生出于系来了。（注40）

（彼はまた古い本を多用し、時には物語の翻訳に近くなっている。だが、昔のことをくり返すのは単なる好奇心だけではなく、より深い根拠に基づいてのことである。彼はその材料に含まれている昔の人々の生活から、自分の心情にぴったりし、それに触れ得る何ものかを見出そうとする。だから、昔の物語は彼によって書き改められると、新たな生命が注ぎこまれ、現代人と関係が生じてくる。）（翻訳は『魯迅全集 第十二卷（古籍海賊集・訳文序践集）』（一九八五年、学習研究社）の小谷一郎氏の翻訳により）

芥川龍之介は自分の創作態度について、以下のように述べた。

材料は、従来よく古いものからとつた。が、材料はあつても、自分がその材料の中へはいれなければ、―材料と自分の心もちとが、ぴつたり一つにならなければ、小説は書けない。無理に書けば、支離滅裂なものが出来上る、僕はあせつて何度もさう云ふ莫迦な目に遇つた。：

書いてゐる時の心もちを云ふと、拵へてゐると云ふ氣より、育ててゐると云ふ氣がある。人間でも事件でも、その本来の動き方はたつた一つしかない。その一つしかないものをそれからそれへと見つけながら書いて行くと云ふ氣がする。一つそれを見つければ、もうそれより先へはすゝまれない。すゝめば、必ず無理が出来る。(注41)

芥川龍之介は歴史小説の形を利用し、現代小説を書いた。彼は古典に題材を取りながらも、そこに現代的な技巧や心理的解釈を加え、鋭い人間心理を剔抉している。芥川がいる時代は伝統的な秩序を崩壊している時代である。彼は小説を通じ、日本社会の暗黒を暴露した。しかし、彼は日本社会の暗黒の暴露を留めらず、人間性の暴露にも深める。芥川龍之介は古典小説を基に、自分の加工を加え、どの時代でも、どこでも、どんな人でも、起こりえることを描いた。

魯迅は中国国民の愚劣な精神を改変したいという思いから、文学活動を始めた。「阿Q正伝」の時代背景について、「阿Q正伝」の第七章「革命」の冒頭に「宣統三年九月十四日」と書かれ、この日は西暦一九一一年十一月四日であり、すなわち辛亥革命の武昌起義の二十五日後である。それ故、阿Qが参加するのは辛亥革命である。「阿Q正伝」は辛亥革命の不徹底さを風刺するために作られた小説である。魯迅は未莊を中国社会の縮図にし、阿Qを中国国民の代表にしている。阿Qという人物を通じ、労働人民の悲惨な生活を描き、国民の愚痴を風刺し、当時の中国旧社会の暗黒とその病根を暴露している。

魯迅と彼の作中人物が生まれた時代は封建的、蒙昧な歪曲された社会である。彼は「悪しき中国人」のすべての「悪」を阿Qの一身に描き、中国人の国民性の暗黒面のすべての要素を阿Qの身から見つける。だから阿Qはある意味ではその時代の中国人の代名詞であり、彼は中国人の品性の結晶であり、中国四千年の伝統が作り出した一人の悲しむべき人物である。阿Qの身では封建社会から生まれた奴隷の性格の以外に、精神的勝利法を持っている。この精神的勝利法は、かつて世界帝国まで築き世界の文明発展に大きく寄与した中国民族にとつて、弱肉強食の時代に敗北に敗北を重ね、悲運のどん底に陥った時に、唯一に見栄を保つ心理的な自慰の手段である。阿Qは「姓名」「出身地」が少々あいまいでなく、「行状」もあいまいである。つまり、「阿Q」という人物は特定できず、實在人物ではない。もし誰か阿Qをそのまま現実世界にいる實在人物のモデルを探しても、徒勞に過ぎない。「阿Q」は現実社会ではないが、どこでもいる存在である。

魯迅自身は、一九二五年五月二十六日に「俄文译本『阿Q正伝』序及著者自叙传略」の中

で次のように述べている。

我虽然已经试做，但终于自己还不能很有把握，我是否真能够写出一个现代的我们国人的魂灵来。别人我不得而知，在我自己，总仿佛觉得我们人人之间各有一道高墙，将各个分离，使大家的心无从相印。这就是我们古代的聪明人，即所谓圣贤，将人们分为十等，说是高下各不相同。其名目现在虽然不用了，但那鬼魂却依然存在，并且，变本加厉，连一个人的身体也有了等差，使手对于足也不免视为下等的异类。造化生人，已经非常巧妙，使一个人不会感到别人的肉体上的痛苦了，我们的圣人和圣人之徒却又补了造化之缺，并且使人们不再会感到别人的精神上的痛苦。

：现在我们所能听到的不过是几个圣人之徒的意见和道理，为了他们自己；至于百姓，却就默默的生长，萎黄，枯死了，像压在大石底下的草一样，已经有四千年！

：在将来，围在高墙里面的一切人众，该会自己觉醒，走出，都来开口的罢，而现在还少见，所以我也只得依了自己的觉察，孤寂地姑且将这些写出，作为在我的眼里所经过的中国的的人生。（注42）

（私は努力してみているが、近代、我が国民の魂を描き出せるかにはそれほど自信がない。他の人たちがどう思っているか分からないが、私から見ると、私たち人間と人間との間にまるで高い壁があり、それがお互いを分離し、理解し合えないようにしていると思う。古代の聖賢が人を十等級に分け、それぞれ違うと言う。その言い方は現在すでに存在していないが、その魂は依然として存在しており、しかも一層ひどくなり、人間の体さえ等差があり、手が足を下等の可笑しなものとみなしている。造化主が人を巧妙に作って、人に他人の肉体的苦痛を感じさせないようにしている。聖人と聖人の弟子はその不足を補い、さらに人に他人の精神的苦痛を感じさせないようにした。

：現在私たちが知っているのは何人かの聖人の弟子の見解と道理に過ぎない。それは彼ら自分自身のためのものである。庶民はただ黙々と生き、そして枯れ、黄ばみ、死んでいく。まるで大きな石の下の草のように、すでに四千年が経つ。

：将来、壁に囲まれた民衆が覚醒し、出てきて主張をするだろう。しかし、現在はまだない。それで私は、自分の観察により、孤独に、とりあえずこれらのことを書き、自分の目で見た中国人の人生とする）（翻訳は張瓊華氏の「阿Qは何を意味しているのか」『阿Q正伝』の構造を手掛かりに「」により）

魯迅はそこに人々の注意を向け、何とかしこれを改めていこうという気概を持っていた。文学で中国人の精神を救う「国民性の改造」を進めることは魯迅が文学に込めた最大の使命である。

簡単に言うと、魯迅は社会に注目し、中国の旧社会を変革したい。芥川は魯迅に比べ、社会への意識が薄く、人間性に注目し、人間心理を剔抉している。

二人は厳しく人間性の暗さを暴露したという点では共通しているものの、社会への向き

合い方が異なる。芥川は失恋体験でエゴイズムを痛感し、現実から目を背け、なるべく古典の世界に浸った。彼の一生はエゴイズムから離れなかった。そして人間性に対し、彼は真実を見据え、冷静で残酷な態度で分析している。魯迅もいつも人間性の醜さを暴いたが、始終現実社会から離れなかった。中国の半植民地半封建社会の時代背景の下で、彼は封建伝統文化が国民へ与える影響を注目している。国民の麻痺された精神に痛心し、人生の苦痛に冷静な認識を持っている。彼は逃げずに、積極的な態度で人生の醜さを暴き、国民の曲がった根性を変えたいと考えていた。

芥川龍之介と魯迅、ほぼ同じ時代に生まれた二人はいる時代背景、家庭環境、人生経歴が似ているところが多い。また現実に対する態度も相似している。魯迅は日本から帰国した後、芥川の「羅生門」と「鼻」を翻訳し、中国に紹介した。その翻訳した作品として、「中正確に訳してある」（注43）と芥川によっても評価された。「羅生門」と「鼻」は芥川の前期の代表作品であり、「阿Q正伝」も魯迅の前期の代表作品である。「羅生門」「鼻」と「阿Q正伝」の比較を通じ、魯迅の創作初期は芥川作品の影響を受けつつも独自の文学世界を構築したことが証明できた。

- 注
 注1 芥川龍之介 「日本小説の支那訳」 『芥川龍之介全集・第四卷』 筑摩書房 一九七一年六月 二二五頁
- 注2 関口安義 『芥川龍之介とその時代』 筑摩書房 一九九九年三月 四三九頁
- 注3 増田渉 『中国文学史研究―「文学革命」と前夜の人々―』 岩波書店 一九六七年七月 三五五頁
- 注4 芥川龍之介 『芥川龍之介全集・第七卷』 筑摩書房 一九七一年九月 八二頁
- 注5 芥川龍之介 『芥川龍之介全集・第二卷』 岩波書店 一九九七年一月 四六〇頁
- 注6 山下真史 「羅生門」は〈愉快な小説〉―三好行雄「羅生門」論再考 中央大学国文学会 (61) 中央大学国文学会 二〇一八年三月 一六頁
- 注7 田村修一 芥川龍之介「鼻」論―コミュニケーションの願い 論究日本文学(71) 立命館大学 一九九九年一月 五八頁
- 注8 魯迅 「呐喊」 『魯迅全集・第一卷』 人民文学出版社 一九七三年一月 二六九・二七〇頁
- 注9 注8と同じ 二七一頁
- 注10 魯迅 「阿Q正傳の成因」 「華蓋集續編 續篇的續篇」 『魯迅全集・第三卷』 人民文学出版社 一九七三年一月 三六六・三六七頁
- 注11 竹内好 「魯迅」 福田恆存 花田清輝 江藤淳 吉本隆明 竹内好 林達夫 『昭和文学全集27』:七七三・八四八 一九八九年三月 八一七頁
- 注12 魯迅 「我怎么做起小说来」 「南腔北調集」 『魯迅全集・第五卷』 人民文学出版社 一九七三年一月 一〇六・一〇七頁
- 注13 魯迅 周作人 「附录 关于作者的说明」 『现代日本小説集』 上海商务印书馆 一九二三年六月 三六六頁
- 注14 注13と同じ 三七九・三八〇頁
- 注15 周作人 「魯迅的文学修养」 『魯迅的青年时代』 河北教育出版社 二〇〇二年一月 五八頁
- 注16 周作人 「附录三 关于魯迅之二」 『魯迅的文学修养』 『魯迅的青年时代』 河北教育出版社 二〇〇二年一月 一三〇頁
- 注17 注12と同じ 一〇六・一〇八頁
- 注18 「玩笑只当它玩笑」の初出は「花边文学」 一九三四年六月 引用は『魯迅全集・第五卷』 人民文学出版社 一九七三年一月 二二頁 五七七頁
- 注19 魯迅 「关于翻译的通信」 「二心集」 『魯迅全集・第四卷』 人民文学出版社 一九七三年一月 二二頁 三七七・三七八頁
- 注20 王唯斯 芥川龍之介「羅生門」と「鼻」の中国語訳について―魯迅訳と1970年代以降の翻訳成果の懸隔― 文教大学大学院言語文化研究科紀要 第五号 二〇一五年三月 六三頁

- 注21 鲁迅 『出了象牙之塔』后记』 『鲁迅全集・第十三卷』 人民文学出版社 一九七三年一月 三八〇頁
- 注22 鲁迅 『硬译』与『文学的阶级性』 『二心集』 『鲁迅全集・第四卷』 人民文学出版社 一九七三年一月 二一〇頁
- 注23 注22と同じ 二二三頁
- 注24 注20と同じ 七三頁
- 注25 鲁迅 『題未定』草』 「且介亭杂文二集」 『鲁迅全集・第六卷』 人民文学出版社 一九七三年一月 三四八・三四九頁
- 注26 鲁迅 『艺术论（卢氏）』 『鲁迅全集・第十五卷』 人民文学出版社 一九七三年一月 一七五頁
- 注27 注22と同じ 二二三頁
- 注28 注19と同じ
- 注29 鲁迅 周作人 『现代日本小说集』 上海商务印书馆 一九二三年
- 注30 芥川龍之介 『芥川龍之介全集・第四卷』 筑摩書房 一九七一年六月 二二五・二二六頁
- 注31 高橋龍夫 『羅生門』論―感性から論理へ― 『日本語と日本文学』23 一九九六年八月 引用は浅野洋 『芥川龍之介作品論集成 第1卷羅生門―今昔物語の世界』 翰林書房 二〇〇〇年三月 一四八頁
- 注32 三好行雄 「無明の闇―「羅生門」の世界」 『芥川龍之介論』 筑摩書房 一九九三年 六二頁
- 注33 駒尺喜美 『芥川龍之介の世界』 法政大学出版社 一九七二年一月 二八頁
- 注34 王書璋 比較文学の角度から「羅生門」を読む―下人の面炮をめぐって― 語文論叢(27) 千葉大学文学部日本文化学会 二〇一七年七月 二二頁
- 注35 吉田精一 『芥川龍之介』 新潮文庫 一九五八年 六二・六三頁
- 注36 駒沢喜美 『芥川龍之介の世界』 法政大学出版社 一九七二年 二八頁
- 注37 悉知由紀夫 『羅生門』「下人の行方」と「下人の心」―「まだ燃えてゐる火の光」をめぐって― 国語論集(12) 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 二〇一五年三月 一四九頁
- 注38 冉秀 阿Qの精神構造―「賢人、馬鹿、奴隸」との関連において― 山口大学大学院東アジア研究科東アジア研究(15) 二〇一七年三月 一九四・一九五頁
- 注39 笠井秋生 「鼻」―漱石書簡の意味 「梅花短大国語国文」創刊号 一九八八年七月 引用は浅野洋 『芥川龍之介作品論集成 第1卷羅生門―今昔物語の世界』 翰林書房 二〇〇〇年三月 二一四頁
- 注40 注13と同じ 三七九・三八〇頁
- 注41 芥川竜之介 「序に代ふ―私と創作―」 『煙草と悪魔…他10編』 新潮社 一九一七年 1・3頁

注42 鲁迅 「俄文译本『阿Q正传』序及著者自叙传略」 「集外集」 『鲁迅全集·第七卷』 人民文学出版社 一九七三年二月 三五五頁

注43 注1と同じ

参考文献目録

テキスト

- 鲁迅 『鲁迅全集・第一巻』 人民文学出版社 一九七三年二月一二月
鲁迅 『鲁迅 阿Q正伝／狂人日記／他』 (竹内好訳) 河出書房 一九七一年三月
芥川龍之介 『芥川龍之介全集1』 筑摩書房 一九七一年三月

論文

- 王書璋 比較文学の角度から「羅生門」を読む―下人の面炮をめぐって― 語文論叢(27)
千葉大学文学部日本文化学会 二〇一七年七月
悉知由紀夫 『羅生門』 「下人の行方」と「下人の心」―「まだ燃えてゐる火の光」をめぐって― 国語論集(12) 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 二〇一五年三月
王唯斯 芥川龍之介「羅生門」と「鼻」の中国語訳について―魯迅訳と1970年代以降の翻訳成果の懸隔― 文教大学大学院言語文化研究科紀要 第五号 二〇一五年三月
水洞幸夫 芥川龍之介「羅生門」論―下人が盗みをする理由 金沢大学国語国文(34) 金沢大学国語国文学会 二〇〇九年三月
日置俊次 芥川龍之介「羅生門」論 青山語文(35) 青山学院大学 二〇〇五年三月
廻野聡紘 文学教材で何を読むのか―芥川龍之介『羅生門』の場合― 尾道市立大学日本文学論叢(8) 尾道市立大学日本文学会 二〇一二年
小泉浩一郎 『羅生門』(初稿)の空間 その主題把握をめぐり(特集虚構の時空) 日本文学35(1) 日本文学協会 一九八六年
付自文 芥川龍之介「羅生門」論 下人の内面性について 札幌大学女子短期大学部紀要(67) 札幌大学女子短期大学部 二〇一九年三月
猪川優子 生徒の思考を導く読み 「羅生門」を起点として 広島文教教育(32) 広島文教女子大学教育学会 二〇一八年二月
黄健 芥川龍之介の文学の特色 岡山商大論叢46(3) 岡山商科大学学会 二〇一一年三月
月
冉秀 阿Qの精神構造―「賢人、馬鹿、奴隸」との関連において― 山口大学大学院東アジア研究科東アジア研究(15) 二〇一七年三月
白井宏 『阿Q正伝』の教材化と中国における解釈―『中学課本魯迅小説匯釈』の紹介―(国語科)教科研究) 名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要(30) 名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校 一九八五年八月
李爲民 阿Qの革命 革命参加の原因及びその革命観について 多元文化(12) 二〇一二年三月
張瓊華 阿Qは何を意味しているのか―『阿Q正伝』の構造を手掛かりに― 目白大学人文学研(16) 二〇二〇年三月
李楽 芥川龍之介と魯迅が女性に向けたまなざし―『手巾』と『祝福』から見る― 札幌大

- 学女子短期大学部紀要(63) 二〇一六年三月
徳永重良 魯迅とその周辺の人びと―日中関係比較の視点から― 人文社会科学論叢(2
8) 宮城学院女子大学附属人文社会科学研究所 二〇一九年
邢雪艷 魯迅の阿Qと井伏鱒二のエイ―「阿Q正伝」と「母下氏邸」について― 教育研究
所紀要(11) 文教大学 二〇〇二年一二月